匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ

昭和63年3月

島根県匹見町教育委員会

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書 I

島根県匹見町教育委員会

序　　文

本書は、匹見町内における埋蔵文化財分布調査第一年次の調査報告書であります。

匹見町内には神田遺跡、水田ノ上遺跡、石ケ坪遺跡更に新槇原遺跡など旧石器、縄文時代の貴重な遺跡が発見されていますが、それらの発掘の状況から判断して、未だ町内各地に埋蔵文化財が存在するであろうと考古学関係者の期待が持たれていました。折しも、かねての計画であった県営圃場整備事業が大字匹見・紙祖の両地区において実施の段階となり、８カ年の計画のもと昭和62年秋から着工の運びとなりました。

これに先立ち当教育委員会としては、これ等圃場整備地域内に未だ散在すると考えられる埋蔵文化財の実態調査と保存の必要性から、県文化課の指導のもとに埋蔵文化財分布調査を実施することになり、調査を島根大学に依頼いたしました。幸い法文学部歴史学教室の田中義昭教授の快諾を頂き、８月の夏期休暇期間を主体として分布調査を実施して頂く事が出来ました。

この調査の結果、当初我々素人判断で遺跡不在と考えられた地域からも遺跡が発見されるなど、縄文・弥生時代のものとされる遺物多数が発掘採取され、先人達の生活の営みが古代において可成り広範囲に実在した事実が今回の分布調査を通じて確認されました。

こうした先人達の汗と脂によって匹見町が開発されたことを推測するに足る遺跡等発見の結果を収録し、資料保存と史実を後世に伝える為、本書を発刊するものであり、この報告書が考古学上関係者の参考となれば幸いであります。

最後に分布調査の実施にあたり御協力頂いた島根大学田中義昭教授始め島大学生の皆さん、土地所有者の方々、地元作業員の方々に深甚なる謝意を表するものであります。

昭和63年３月

匹見町教育委員会

教育長　吉　原　　了

例　　言

1. 本書は昭和62年度国庫補助事業として、匹見町教育委員会が行なった町内遺跡詳細分布調査の報告書である。
2. 調査は島根大学考古学研究室及び島根県教育委員会文化課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導　島根大学法文学部教授　田中義昭
匹見町文化財専門委員　渡辺友千代
島根県教育委員会文化課文化財保護主事　卜部吉博
島根県教育委員会文化課文化財保護主事　松本岩雄

事務局　匹見町教育委員会教育長　吉原　了
匹見町教育委員会教育次長　藤井厚志
匹見町教育委員会補佐　渡辺　隆
匹見町教育委員会派遣社会教育主事　田原敏明

調査担当者　島根大学法文学部教授　田中義昭

調査補助員　赤坂二史、大西貴子、柴尾由美、新海正博、松尾晴司、池渕高史、河村創造
木瀬高宏、西尾秀道、林原　修、間野大丞、物部茂樹

調査参加者　栗田　修、栗田　定、久保田博万、山崎貞一、砂川宗堅、中村靖子、
石原八重子、坂原加津子

3. 発掘調査に際しては、土地所有者をはじめ地元の方々に終始多大な協力を頂いた。また、遺物整理にあたっては、島根県教育委員会文化課の足立克己、柳浦俊一、島根県立博物館主任学芸員の村上　勇の各氏から多くの御教示を得た。石器の石材鑑定については、島根大学理学部地質学教室にお願いした。併せて感謝の意を表したい。
4. 本書の執筆は、調査員、調査補助員、事務局が行ない（執筆者名は目次および各項末尾に記す）、編集は田中義昭の指導のもとに松本岩雄、赤坂二史が行なった。

目　　次

第１章　調査に至る経過……（藤井厚志）……　1
第２章　遺跡の位置と環境……（田中義昭）……　2
第３章　家廻り遺跡の調査……（赤坂二史・物部茂樹）……　6
　1.　はじめに……　6
　2.　調査の概要……　6
　3.　各調査区の概要……　8
　4.　出土遺物……　11
第４章　石ヶ坪遺跡の調査……（赤坂二史・西尾秀道）……　14
　1.　はじめに……　14
　2.　調査の概要……　14
　3.　各調査区の概要……　15
　4.　出土遺物……　20
第５章　木戸開中遺跡の調査……（赤坂二史・間野大丞・林原　修）……　21
　1.　はじめに……　21
　2.　調査の概要……　22
　3.　各調査区の概要……　22
　4.　出土遺物……　30
第６章　Ｅ地点の調査……（林原　修）……　38
　1.　はじめに……　38
　2.　調査の概要……　38
　3.　各調査区の概要……　39
第７章　総　括……（田中義昭）……　41

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置……1
第２図　調査地点の位置……2
第３図　周辺の遺跡分布図……4
第４図　家廻り遺跡調査区配置図……7
第５図　家廻り遺跡土層断面図……9
第６図　ｂ７区ＳＫ01実測図……10
第７図　家廻り遺跡出土縄文土器・弥生土器・陶器実測図……12
第８図　家廻り遺跡出土石器実測図……13
第９図　石ヶ坪遺跡調査区配置図……14・15
第10図　石ヶ坪遺跡土層断面図 (1) ……17
第11図　石ヶ坪遺跡土層断面図 (2) ……19
第12図　石ヶ坪遺跡出土縄文土器・鉄鏃実測図……20
第13図　石ヶ坪遺跡出土石器実測図……21
第14図　木戸開中遺跡調査区配置図……23
第15図　木戸開中遺跡土層断面図 (1) ……25
第16図　木戸開中遺跡土層断面図 (2) ……27
第17図　木戸開中遺跡出土縄文土器実測図……30
第18図　木戸開中遺跡出土弥生土器実測図……31
第19図　木戸開中遺跡出土土師器・須恵器実測図……33
第20図　木戸開中遺跡出土石器実測図……35
第21図　木戸開中遺跡出土木製品実測図……37
第22図　Ｅ地点調査区配置図……39
第23図　Ｅ地点土層断面図……40

第1章　調査に至る経過

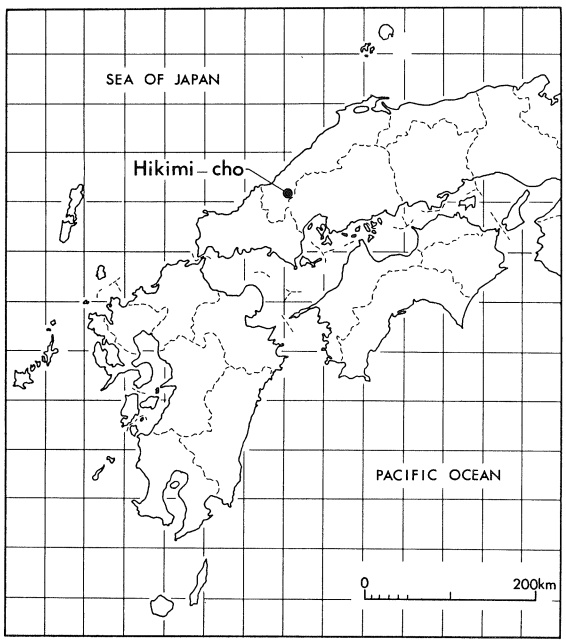
匹見町では、今迄本格的な圃場整備事業が行なわれておらず、圃場整備による農業経営の近代化は関係者にとって多年の強い要望であり課題であった。このたび、昭和62年度を初年度として、大字匹見・紙祖地区において約100*ha*の県営圃場整備事業が数年次にわたり着手の運びとなった。

一方、整備計画区域内には、水田ノ上・石ケ坪遺跡をはじめとする遺跡が存在することから、これらを含めた計画区域の全域について分布調査を実施し、事業との調整・整備を計ることにした。昭和62年度は、国庫補助事業により調査を行なうこととしたが、その際直面した問題は調査担当部局の匹見町教育委員会に専門職員がおらず、調査体制がなかったことである。このため、島根大学田中義昭教授に調査についての全面的ご支援をお願いしたところ、多忙の中にあってご快諾を戴くと共に、同大歴史学教室の学生の皆さんのご協力の下に調査がスタートすることになった。

調査にあたっては、県文化課、田中教授、匹見町文化財専門委員渡辺友千代氏の調査指導によって、昭和62年8月6日から10日まで、更に8月22日から31日までの間、大字紙祖地区の内、小原・石組・元組・荒木の四地点について第一次調査を実施した。第二次調査は、9月17日から19日まで、及び9月26日から10月6日までの間、小原・石組の河岸段丘上の水田を中心に行なった。第一次・第二次調査の結果、新たに小原で家廻り遺跡の存在が確かめられると共に、元組の石ケ坪遺跡、荒木の水田ノ上遺跡周辺では、これらが、かなり広範な広がりを持つことが判った。

今年度の分布調査で、石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、木片等かなりの遺物が出土し、これらは昭和62年12月から昭和63年2月にかけ県文化課において、田中教授並びに学生の皆さんによって遺物整理が行なわれたところである。

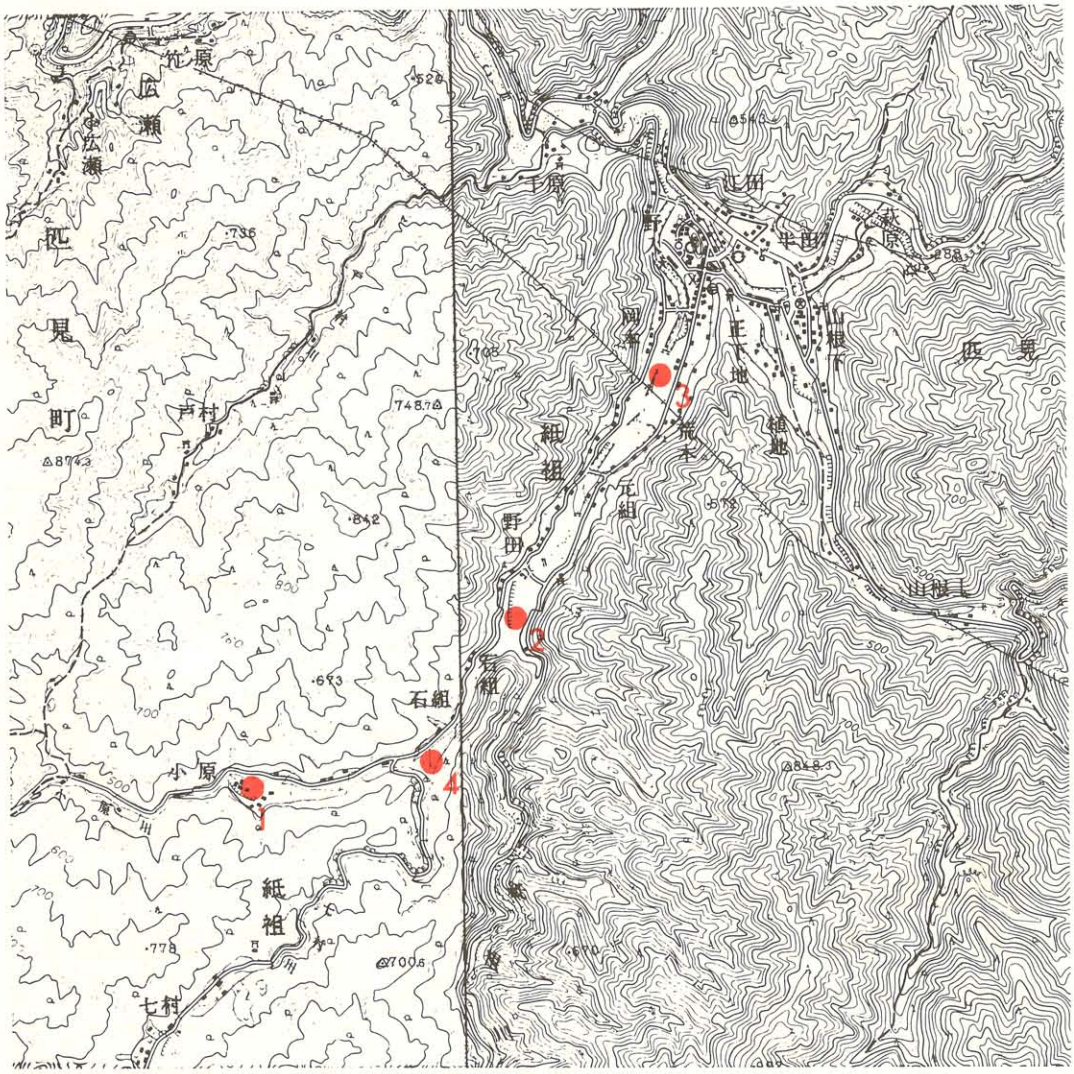
今回調査以前の出土品等から、当地域には縄文・弥生・古墳等の各時代の人々の営みの歴史があったことが判明していたが、それらがこのたびの調査によって、より詳らかになって来た。　　（藤井厚志）



第1図　遺跡の位置

第2章　遺跡の位置と環境

自然環境　家廻り遺跡、石ケ坪遺跡、木戸開中遺跡等の諸遺跡が位置する匹見盆地は、標高1000～1200ｍの山峰が連なる中国山地のほぼ中央部にある。北東から南西方向に走る断層地塊の深凹部を貫流する匹見川とその支流の広見川、紙祖川によって形成された段丘が盆地の人文景観と生産活動の自然的基礎を提供している。屹立する山地の頂部と段丘面の比高差は600ｍ以上もあり、この



第2図　調査地点の位置　　1：50000

（1．家廻り遺跡、 2．石ケ坪遺跡、 3．木戸開中遺跡、 4．E地点）

急峻な斜面に何等かの生活を営むことは相当困難で、大多数の人家と耕地は盆地底部の河岸段丘上に集中することになる。

こうした地形的環境と併せて注意されることは、匹見地域一帯が中国地方でも指折りの多雪・多雨域に属していることである。年間としては山間地帯の冷涼な気候が支配的であるが、冬期は多雪になる場合が多く、ために生計維持には様々な工夫と努力が積み重ねられてきている。

前記の3遺跡は盆地内を北流する紙祖川とその支流・小原川の段丘上に営まれている。紙祖川両岸の段丘は幅約1㎞、長さ約3㎞で、段丘面はほぼ平坦であるが、いくつかの個所では両側の山地裾に崖堆扇状地状のわずかな起伏が認められる。山裾の湧水や扇端の伏流水の存在がここに多くの集落を成立させる一要因をなしたと考えられる。

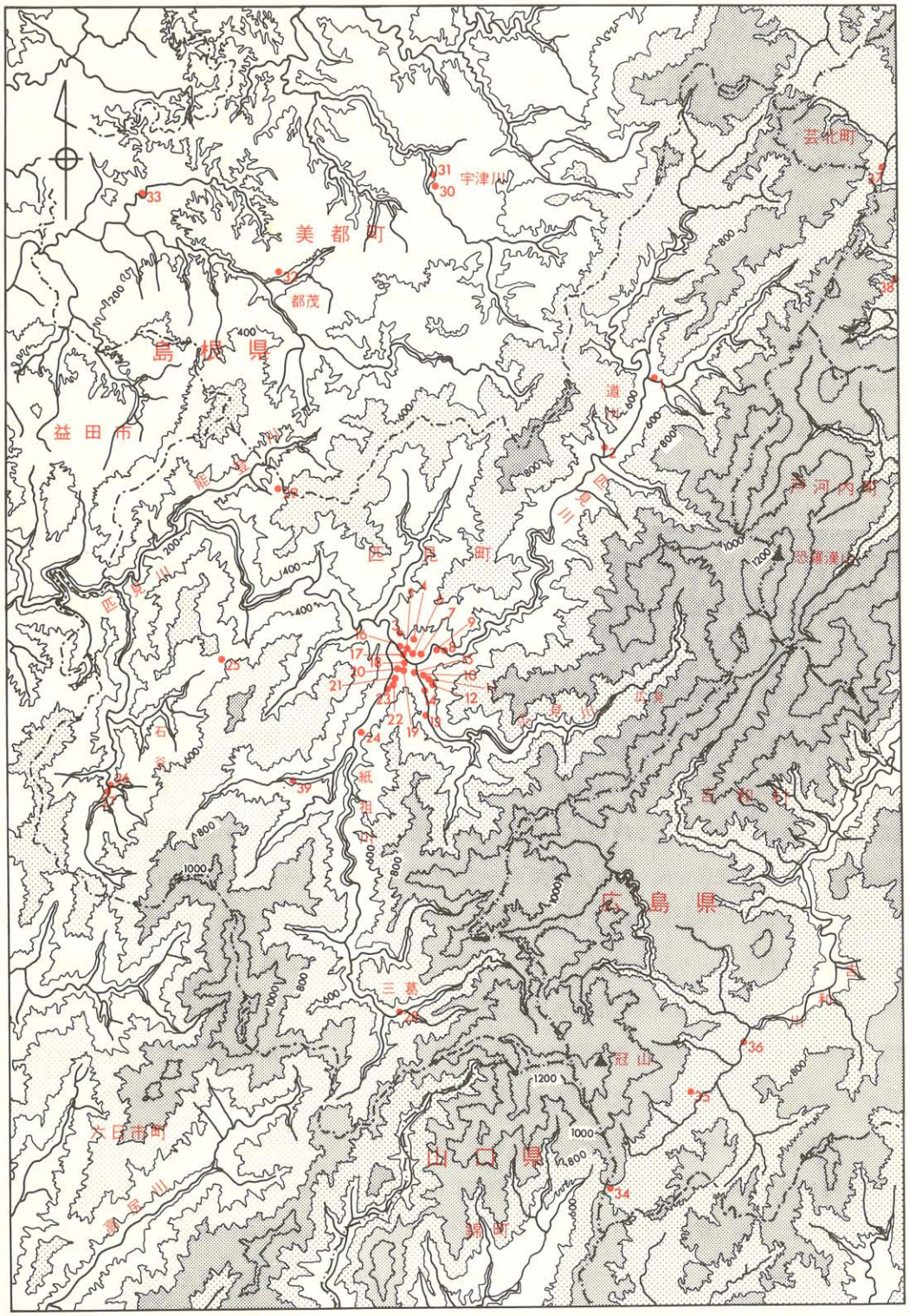
歴史的環境　匹見盆地の歴史の扉を開いたのは先土器時代の人々である。町内道川地区の新槇原遺跡ではこの時代終期の尖頭器と剝片が発見されている。注目されることは1点の剝片がＡＴ火山灰を含む地層から検出されたことで、これより採集品の尖頭器等もこの地層に包含されていた蓋然性が強いと判断された。先土器時代に属する石器（尖頭器）は町内澄川地区でも採集されている。この時代の石材供給地とされる冠山を背後に控え、また多くの石器や剝片が採集された樽床遺跡群等が近くに所在することから考えても今後この時代の遺跡がさらに発見される可能性はきわめて高く、当地域が先土器時代人の旺盛な行動域であったことは十分うかがえよう。

縄文時代の遺跡は11ヶ所知られている。新槇原遺跡では早期末～前期の土器が出土し、それらには陰陽の海岸部や九州方面との関連性の存在が指摘される。[(1)] 紙祖地区の石ヶ坪遺跡で発見された中期の縄文土器も九州に広がる阿高式系統の土器と判定されている。[(2)] はるかな原始時代から遠近いずれの地方とも交通関係を保ちながら展開する当地の歴史的事情をみるべきであろう。

縄文後・晩期は匹見盆地の縄文文化の盛期としてよい。新槇原遺跡を除く10ヶ所の遺跡はいずれも後・晩期に属しており、それらは現在の市街地と重なるような状態で分布している。後期の石ヶ坪・半田イセ遺跡、晩期の荒木地区槍田・水田ノ上・野入地区神田の諸遺跡は範囲も広く、遺物の出土量も多い。水田ノ上遺跡では勾玉や土版の類も発見され、この期の遺跡としては注目すべき内容をもっている。このような盆地中央部への遺跡集中をもたらした条件とその実相の解明は、中国地方山間部における縄文文化研究にとって重要な課題といってよいであろう。

弥生時代の遺跡は10ヶ所で認められ、時期的には前期から後期にわたっている。分布は縄文後・晩期と同様に元組・荒木・江田・半田の各地区に広がる。匹見盆地の長い稲作の歴史はこれらの遺跡を残した人々によって先鞭がつけられたのであるが、その開始が海岸平野とほぼ同時になされている点が注意される。弥生後期に属する遺跡が多いということも沿岸部と軌を一にした現象である。

古墳時代は後半期に明かな盛期がある。集落遺跡と思われるものは13ヶ所が数えられ、集中度は


宇津川
美都町
都茂
島根県
益田市
匹見町
匹見川
三葛川
芸北町
戸河内町
恐羅漢山
広島県
紙祖
三葛
冠山
山口県
大日市町
錦町
0
10km

第３図　周辺の遺跡分布

第1表　周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	種別	時代等	No.	遺跡名	所在地	種別	時代等
1	新槇原遺跡	匹見町大字道川字出合原	散布地	先土器・縄文	18	能入遺跡	大字匹見町荒木	散布地	古墳
2	上家屋遺跡	大字道川字下道川	散布地	縄文	19	猿地遺跡	大字紙祖字荒木猿地	散布地	弥生・古墳奈良
3	江田古墳群	大字匹見字江田	古墳群	横穴式石室	20	福田ノ上遺跡	大字紙祖字荒木福田ノ上	集落跡	
4	江田平台遺跡	大字匹見字江田	集落跡	弥生	21	水田ノ上遺跡	大字紙祖字荒木水田ノ上	集落跡	縄文・弥生
5	塚田遺跡	大字匹見字江田	散布地	古墳		**木戸開中遺跡**	大字紙祖字荒木木戸開中	散布地	縄文・弥生古墳・奈良
6	ヨレ遺跡	大字匹見字半田	集落	縄文・弥生古墳・奈良	22	槍田遺跡	大字紙祖字荒木槍田	散布地	縄文・弥生奈良
7	半田遺跡美濃殿地区	大字匹見字半田	散布地	古墳・奈良	23	長グロ遺跡	大字紙祖字元組長グロ	散布地	弥生・奈良
	サイカチ地区	大字匹見字半田	散布地	弥生・古墳奈良	24	**石ケ坪遺跡**	大字紙祖字乙佐原	集落跡	縄文
	八祖地区	大字匹見字半田	散布地	古墳・奈良	25	牛首古墳	大字石谷字内石牛首	古墳	
	イセ地区	大字匹見字半田	散布地	縄文	26	土井田遺跡	大字石谷字内谷土井田	散布地	縄文
	辰美屋地区	大字匹見字半田	散布地	縄文・弥生古墳・奈良	27	新宅遺跡	散布地		
	家ノ後地区	大字匹見字半田	散布地	弥生・古墳奈良	28	新井屋畑遺跡	大字紙祖字三葛	散布地	
	木ワダ畑地区	大字匹見字半田	散布地	弥生・奈良	29	尖頭器出土推定地	大字澄川字能登	散布地	
8	上黒和遺跡	大字匹見字黒和	散布地	弥生	30	本郷遺跡	美濃都美都町大字宇津川	散布地	縄文・古墳中世
9	沖ノ田遺跡	大字匹見字萩原	散布地	縄文・弥生奈良	31	お熊ぐろ古墳	美濃郡美都町大字宇津川	古墳	古墳
10	川原田遺跡	大字匹見字山根上	散布地	縄文	32	屋敷平横穴	美濃郡美都町大字都茂字屋敷平	横穴	横穴
11	和田古墳	大字匹見字山根上	古墳	横穴式石室	33	小原古墳群	美濃郡美都町大字小原	古墳	
12	永長山古墳群	大字匹見字山根上	古墳	横穴式石室	34	冠遺跡	広島県佐伯郡吉和村	散布地	先土器・縄文
13	越峠遺跡	大字匹見字越峠	石斧	弥生	35	頓原遺跡	広島県佐伯郡吉和村	散布地	縄文
14	サノクチ遺跡	大字匹見字植地	散布地	古墳・奈良	36	半坂遺跡	広島県佐伯郡吉和村	散布地	縄文・弥生
15	土井分遺跡	大字匹見字植地	集落跡	奈良	37	押ケ峠遺跡	広島県佐伯郡芸北町西八幡原	散布地	石器
16	野入古墳	大字匹見字野入	古墳		38	樽床遺跡群W地点	広島県佐伯都芸北町	散布地	先土器
17	神田遺跡	大字匹見字野入	散布地	縄文	39	**家廻り遺跡**	大字紙祖字家廻り	散布地	縄文・弥生

かなり高いとすべきであろう。そこに居住した里人の中の数グループ（有力な農民家族）が江田・和田の古墳群を営造したものと思われる。古墳時代のこうした開拓史は奈良時代以降にも引き継がれたらしい。奈良・平安時代の遺跡は現在14ヶ所で確認されている。個々の内容については不分明であるが、分布密度の濃さはやはり注目されるところで、匹見地域の歴史発展が一貫してその歩みを止めなかったことの確かな証拠がそこにある。このような動向は中世における匹見別府の成立とも繋がるものであろう。

（田中義昭）

註(1)　匹見町教育委員会『新槇原遺跡発掘調査報告書』1987年

(2)　足立克己「山陰石見地方における縄文後期前～中葉土器について」（『東アジアの考古と歴史』中　岡崎敬先生退官記念事業会編）1987年

第3章　家廻り遺跡の調査

1. はじめに

家廻(いえまわ)り遺跡は美濃郡匹見町大字紙祖家廻り1280番地に所在する（第２図)。匹見盆地を東流する紙祖川の支流の小原川は盆地の西端から流れ出して紙祖川に合流する。本遺跡はこの小原川の上流の右岸に形成された幅150～200ｍ程の階段状をなす狭い河岸段丘上に位置している。立地箇所の標高は373ｍである。土地の現況は水田であるが、休耕田になっており、ここに発掘区を設けることができた（図版１－１)。

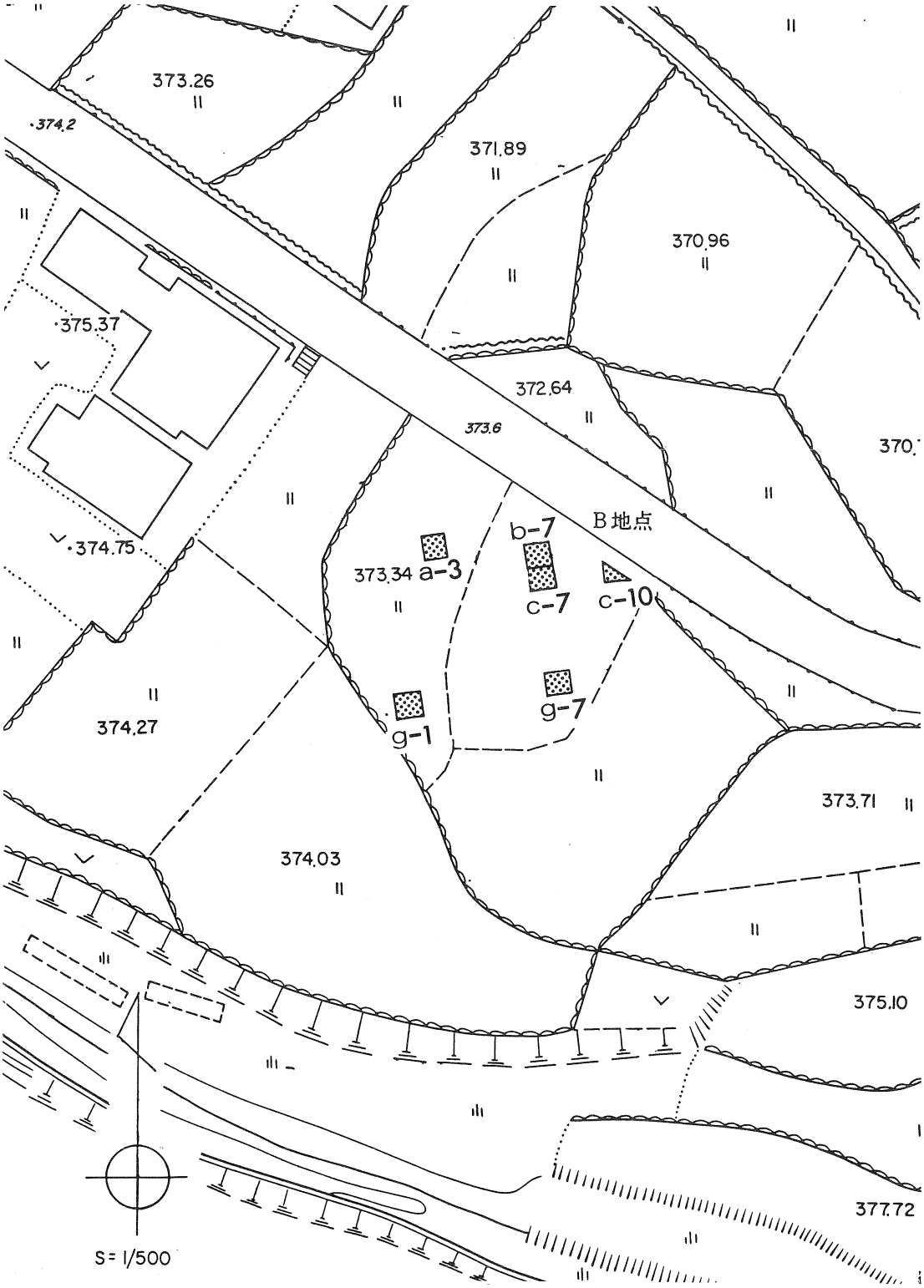
調査は、その主眼が遺跡の所在とその範囲および性格を確認することにあり、1987年８月６日より10日までと23日より28日までの延べ11日間にわたって行なわれた。調査面積は22㎡である。調査の結果、縄文土器・弥生土器か土師器片・陶磁器片・石鏃等が検出され、明確に遺跡と認定された。

2. 調査の概要

調査区の設定場所は、最上部の段丘面の休耕田である。範囲約25×25ｍに南北の磁北線を基準として全域を２×２ｍの方形区に区画し、南北をａ、ｂ、ｃ、…ｚ、東西を１、２、３…10とし、方形区の北西杭をもって当該区の名称とした。この区割りにより範囲確認のために必要で適切と思われる方形区を発掘することにしたが、それはａ３区、ｇ１区、ｂ７区、ｇ７区の諸区である（第４図)。

調査の進行過程でｂ７区において土器片がやや集中して出土することが判明したのでさらにその区の南側にｃ７区を、東側にｃ10区（道路に接していたため三角形区とする)、道路を狭んで北側にも１区（方形区割外であるため特１区とする）を設けて掘り下げた。その結果明らかになった本遺跡の層序、遺物の出土状態は以下のようである。

まず層序についてであるが、概して言えば上部より第１層は耕作土、第２層は濃灰色土層（水田の床土)、第３層は砂利と鉄分のブロックを含む褐色土層、第４層は黄色砂層の順に堆積がみられる。各層はさらに色調、礫・砂利の包含量、粘性、粒子の大きさ等により細分される。第２層はＡ、Ｂに、第３層はＡ～Ｆに、第４層はＡ～Ｅに分層される。またいずれの調査区でも第２層から礫と砂利が多くなり、あるいは巨石に阻まれて掘り下げが不可能になった区もある。各区ごとの層序と遺物の出土状態は次の通りである（第５図)。



第4図　家廻り遺跡調査区配置図

３．各調査区の概要

ａ３区（図版１－２）

現地表面の標高は373.34ｍあまり。

第１層　水田耕作土、黒色を呈する。厚さは10～15cm。

第２Ａ層　濃灰色を呈する。厚さは10～15cm。第１層との境界あたりから礫が見られ、下方にいくに従って大形の礫が現れた。遺物としては打製石鏃片が１点、磁器片４点、陶器片１点、桃の種が出土している。

第３Ｄ層　茶褐色を呈し、厚さは20cm以上に及ぶが、多量の岩石によって、これ以上の掘り下げは不可能。この層からは磁器片１点が出土。

ｂ７区（図版２－１）

現地表面の標高は373.12ｍ、

第１層　水田耕作土、黒色を呈する。層厚は８～15cm。

第２Ｂ層　黒色を呈する砂礫層。厚さは４～15cmである。この層からは剝片１点と磁器片２点、内外面磨研の縄文晩期かと思われる土器片１点が出土。

第３層　茶褐色を呈する第３Ｄ層、褐色を呈する第３Ｅ層、濃灰色を呈する第３Ｆ層に分層される。第３Ｆ層は南東隅にレンズ状に部分的に堆積した層であり、また第３Ｅ層は東壁にみられた層である。それぞれ、凹凸が激しい。層全体の厚さは、10～30cm。第３Ｄ層からは縄文晩期の土器片６点が出土した。そのうち３片は内外面ともきれいに磨研されている。

また、第３Ｄ層から、第３Ｅ層、第３Ｆ層、第４Ｂ層を切り、南壁に向って皿状に陥ち込む遺構（ＳＫＯ１）（第６図）が存在する。はっきりと範囲が確認できるレベルでは、長方形又は、台形のプランを呈し、底は次第に南壁へと傾斜しており、さらに南へとつづいていることが予想される。深さは30cm程度である。この陥ち込みの性格は不明であるが、その内部より縄文晩期かと思われる土器片３点が出土した。

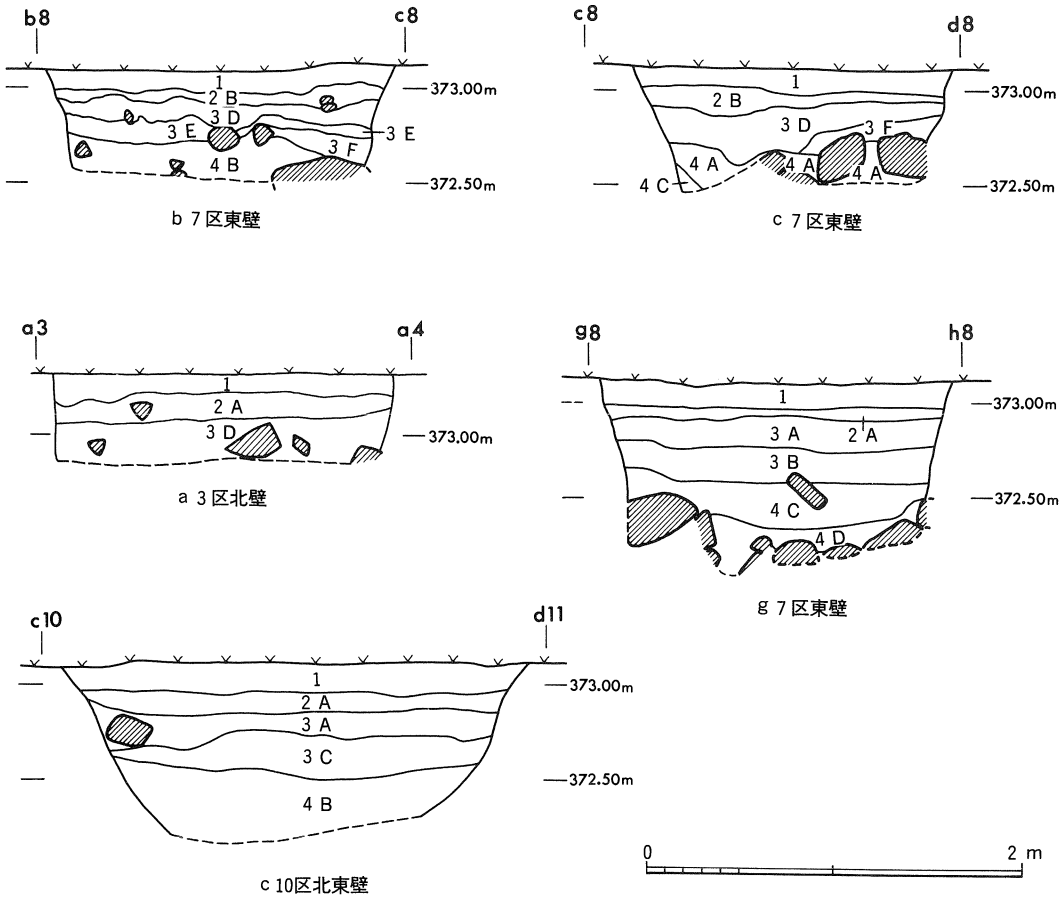
第４層　暗黄色を呈する砂礫層の第４Ａ層と黄色を呈する同じく砂礫層の第４Ｂ層とに分層される。第４Ａ層は北壁だけにみられる層で、第３Ｅ層に類似する層である。

ｃ７区（図版２－２）

ｂ７区で検出された陥ち込みの広がりを確認するために設定した調査区であるが、掘り下げた結果、陥ち込みの南限は幅30cmの土手の中にあるらしくｃ７区まで達していないことが知られた。現地表面の標高は373.12ｍあまりである。

第１層　水田耕作土で黒色を呈する。層の厚さは、10～15cm。

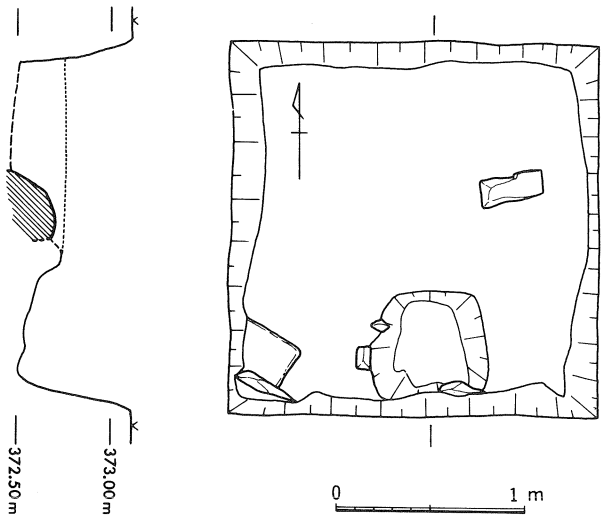
第２Ｂ層　ｂ７区と同様に黒色砂礫層で、厚さは４～15cm。



1. 黒色土
2A. 濃灰色土
2B. 黒色砂礫層
3A. 濃灰色土(粘質で、砂利と赤いブロックを含む)
3B. 灰褐色土 (粘質性)
3C. 赤褐色土
3D. 茶褐色土
3F. 褐色土
3F. 濃灰色土
4A. 暗黄色砂礫層
4B. 黄色砂礫層
4C. 黄色砂層
4D. 黄色砂層 (粘質性)

第5図　家廻り遺跡土層断面図

第3層　この層は、茶褐色を呈し鉄分のブロックを含む第3D層と濃灰色を呈する第3F層に分層される。b7区の陥ち込みと同様に南東の隅に第3D層から第4A層に嵌入する層（SKO2）がみられたが、はっきりと陥ち込みの外形、範囲を確認することはできずその性格は不明である。陥ち込みの中より22点の縄文晩期かと思われる土器の小片が出土した。そのうち1点は、内外面に磨研がみられた。



第６図　b７区 SK01　実 測 図

第４層　この層は暗黄色砂礫層の第４Ａ層と黄色砂層の第４Ｄ層とに分層される。

c 10区

現地表面は標高373.13*m*。

第１層　水田耕作土で黒色を呈する。層の厚さは15～20*cm*。石鏃片１点、磁器片５点（うち１点は伊万里系）が出土した。

第２Ａ層　濃灰色土層である。厚さは５～10*cm*。

第３層　濃灰色を呈し粘質で砂利と赤いブロックを含む第３Ａ層と赤褐色を呈する第３Ｃ層に分層される。

第４Ｂ層　黄色砂礫層で、この層はｂ７区でも認められている。縄文晩期らしき土器片１点が出土した。

g １区

もっとも山裾よりに設けた調査区である。

第１層　水田耕作土で黒色を呈し、厚さ約10*cm*。磁器片６点、陶器片１点が出土している。

第２Ａ層　濃灰色土で、ひじょうに薄く、第１層よりも礫を多く含む。

第３Ｄ層　黄褐色土層である。この層よりひじょうに巨大な岩石が多くなり、これ以上掘り下げは不可能。

g ７区　（図版３－２）

現地表面は標高373.11*m*である。

第１層　水田耕作土で黒色を呈す。層厚は15～20*cm*。

第２Ａ層　濃灰色土層、厚さは２～10*cm*で薄い層。拳大の小石を多く含んでいる。石鏃片が１点出土した。

第３層　濃灰色粘質土層で砂利と赤いブロックを含む第３Ａ層と、砂利を含まない灰褐色を呈する粘質の第３Ｂ層に分層される。第３Ａ層中では炭化物の分布がみられた。北壁に、第３Ｂ層から第４Ｄ層に切り込む形で幅４*cm*深さ10*cm*の細長い陥ち込みが認められたが、その性格は不明である。遺物は第３Ａ層より縄文晩期らしき土器片１点が出土した。

第４層　黄色砂層の第４Ｄ層とその下部の粘性のある黄色砂層の第４Ｅ層とに分層される。この

2層はともによくしまった堅めの土層である。遺物は第4D層から縄文晩期かと思われる土器片2点が出土した。

特1区

道路を挾んだ休耕田に設けた調査区である。上段の休耕田面よりマイナス約70cmにあたる。

第1層　黒色を呈する水田耕作土。磁器2点出土した。

第2層　濃灰色土（第2A層）である。石がかなり多くみられる。

第3A層　濃灰色粘質土で砂利と赤いブロックを含む。第3層上面あたりに炭化物の分布がみられる。その付近から陶器片1点と弥生土器かと思われる土器片1点が出土した。また道路寄りの隅に道路工事にともなうと考えられる黄色砂が発見されており、相当攪乱されている可能性がある。

4. 出　土　遺　物

縄文土器（第7図1～9、図版4－2）

今回の調査で出土した縄文土器の破片総数は36点であり、調査区別の内訳は、b7区から10点、c7区から22点、c10区から1点、g7区から3点出土している。包含層は、b7区では第2B層(黒色砂礫層)、第3D層（茶褐色土）と、その第3D層から下位の層へ嵌入した陥ち込み(SKO1)中である。c7区では第3D層（茶褐色土）から下位の層へ嵌入した陥ち込み（SKO2）中である。c10区では第4D層（黄色砂礫層）、g7区では第3A層（砂利と赤いブロックを含む濃灰色粘質土層）と第4D層（黄色砂層）が包含層である。

出土した縄文土器片は、大半が縄文晩期のものと推定される。そのうち外面に条痕文のみられるものが4点、精製磨研土器片が5点ある。これらのうち器形を推測できるのは1点で、深鉢の一部と思われる。

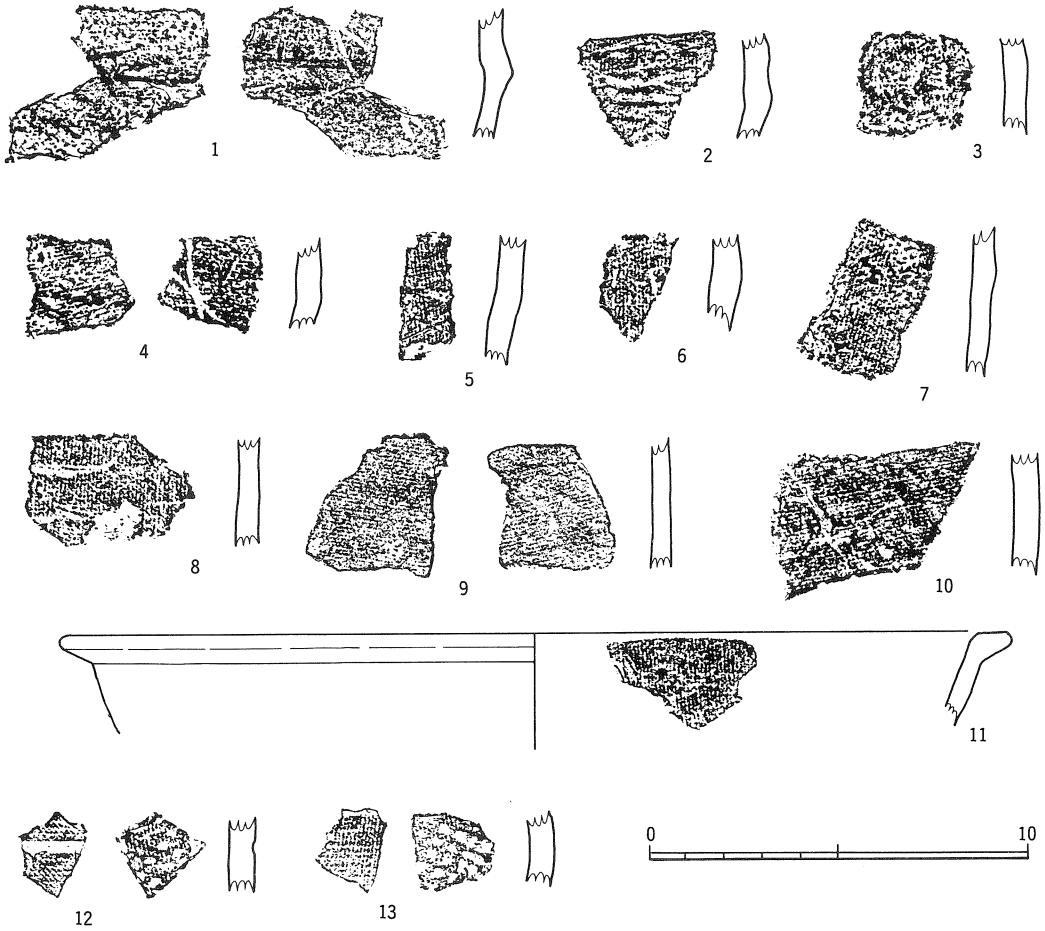
以上の土器片中あまり風化せず、何らかの特徴が認められるものを取り上げ、それらを文様、調整法によって分類を試みた。

A類　条痕文のみられるもの（第7図1～4）。

1は唯一、器形の推測できるものである。外面には横位の条痕文がみられ、内面はナデ調整である。外面には炭化物が付着している。小片なので断定はできないが器種は深鉢で、その胴部屈曲部片と推測される。

2は外面条痕文、内面ナデ調整がみられる。外面に赤銹が付着している。縄文晩期と推定される。

3は外面に条痕を施し、その上にナデ調整を行っている。内面もナデ調整。やや胎土が粗い。縄文晩期と推定される。



第７図　家廻り遺跡出土縄文土器・弥生土器・陶器実測図

４は外面に条痕がみられ、内面はナデ調整である。縄文晩期と推定される。

Ｂ類　内外面ともナデ調整のもの（第７図５～８）。

５～７は内外面ともナデ調整がみられる。縄文晩期と推定される。

８は内外面ともナデ調整である。外面に３本の粘土紐の痕跡がみられる。粘土紐の幅は約1.2*cm*。縄文晩期と推定される。

Ｃ類　表面が磨研されているもの（第７図９）。

９は内外面とも磨研されている。縄文晩期と推定される。

弥生土器（第７図10、図版４－２）

第７図10はｃ７区の第３Ａ層から出土したもので、内外面ともナデ調整がみられる。小片のため器形は不明であるが、胎土・調整等から弥生土器かもしくは土師器と推定される。

陶磁器（第７図11～13、図版４－２、図版５－３）

出土総数は24点である。そのうち14点は水田耕作土中より出土した。残りの10点は、ａ３区第２Ａ層（濃灰色土層）から５点、第３Ｄ層（茶褐色土層）から１点、ｂ７区第２Ｂ層（黒色砂礫層）から２点、ｇ７区第４Ｄ層（黄色砂層）より１点、特１区第３Ａ層（砂利と赤いブロックを含む濃灰色粘質土層）より１点出土している。

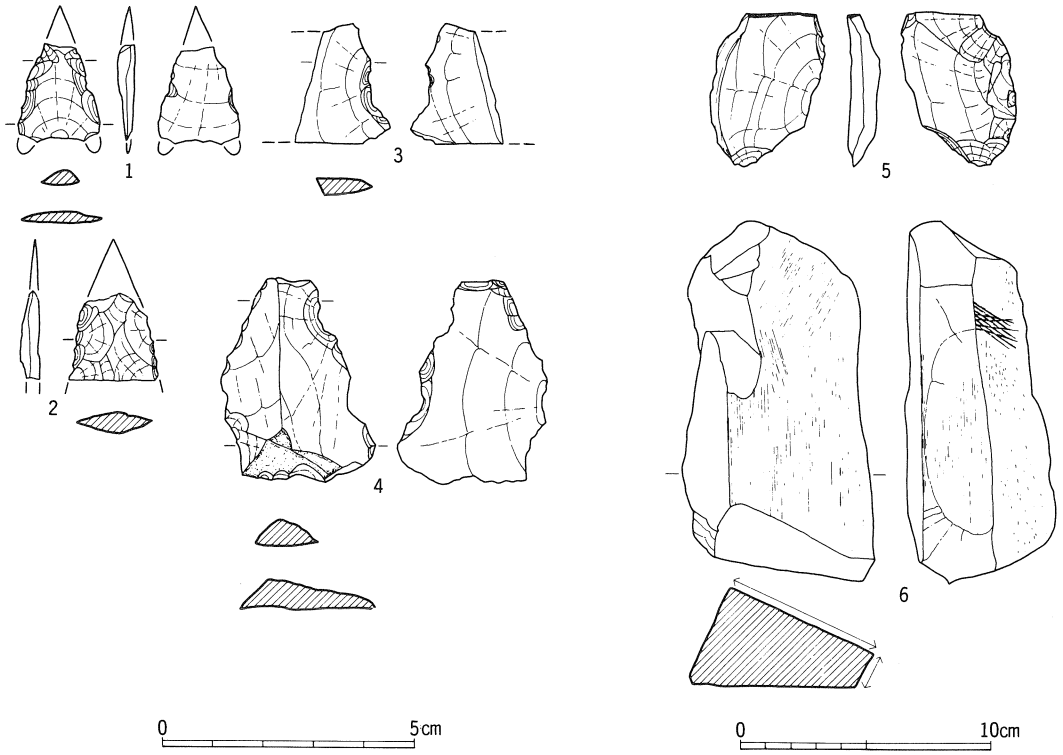
24点のうち陶器は３点、磁器は21点である。ここでは、年代の判定できる陶器片３点を示しておく（第７図11～13)。なお、磁器の中に伊万里系と推定できるものが１点あった(図版５－３－Ａ)。

11は内面に幅3.4㎜の間隔の目の荒い縦方向の卸目がみられる。暗緑色の上薬の跡がわずかに残っている。16世紀末ないし17世紀以降の南蛮系の摺鉢と推定される。

12、13は外面に幅３㎜程の凹線があり、内面には、‘たたき’の当て具の痕跡がある 。17世紀以降、つまり江戸時代以降の唐津系の陶器と思われる。

石器（第８図、図版４－２、５－１、５－２）

石器は石鏃、砥石および剝片が出土した。



第８図　家廻り遺跡出土石器実測図

１はａ３区第２Ａ層出土の流紋岩製石鏃である。凹基式で逆刺部は薄く、両面に大きな剝離面を残す。２はｇ７区第２Ａ層出土の石鏃で材質は不明。尖端部と基部は欠損している。

３はｃ10区第１層出土の流紋岩の剝片で、側縁部に二次調整が認められる。４はｂ７区第２Ｂ層出土の流紋岩の剝片で、背面には一部に自然面を残す。腹面には主要剝離面が残り、一部に二次調整がみられる。細部調整はやや粗いものとなっている。５はｂ７区第２Ｂ層出土の剝片で材質は不明。上部には自然面を残し、一側縁には二次調整が認められる。

６はｃ７区ＳＫＯ２出土の砥石である。石材は酸性凝灰岩を使用している。表面全部と側面の一部に擦痕がみられ、裏面には不規則に走る深い条痕状の擦痕が認められる。（赤坂二史・物部茂樹）

第４章　石ケ坪遺跡の調査

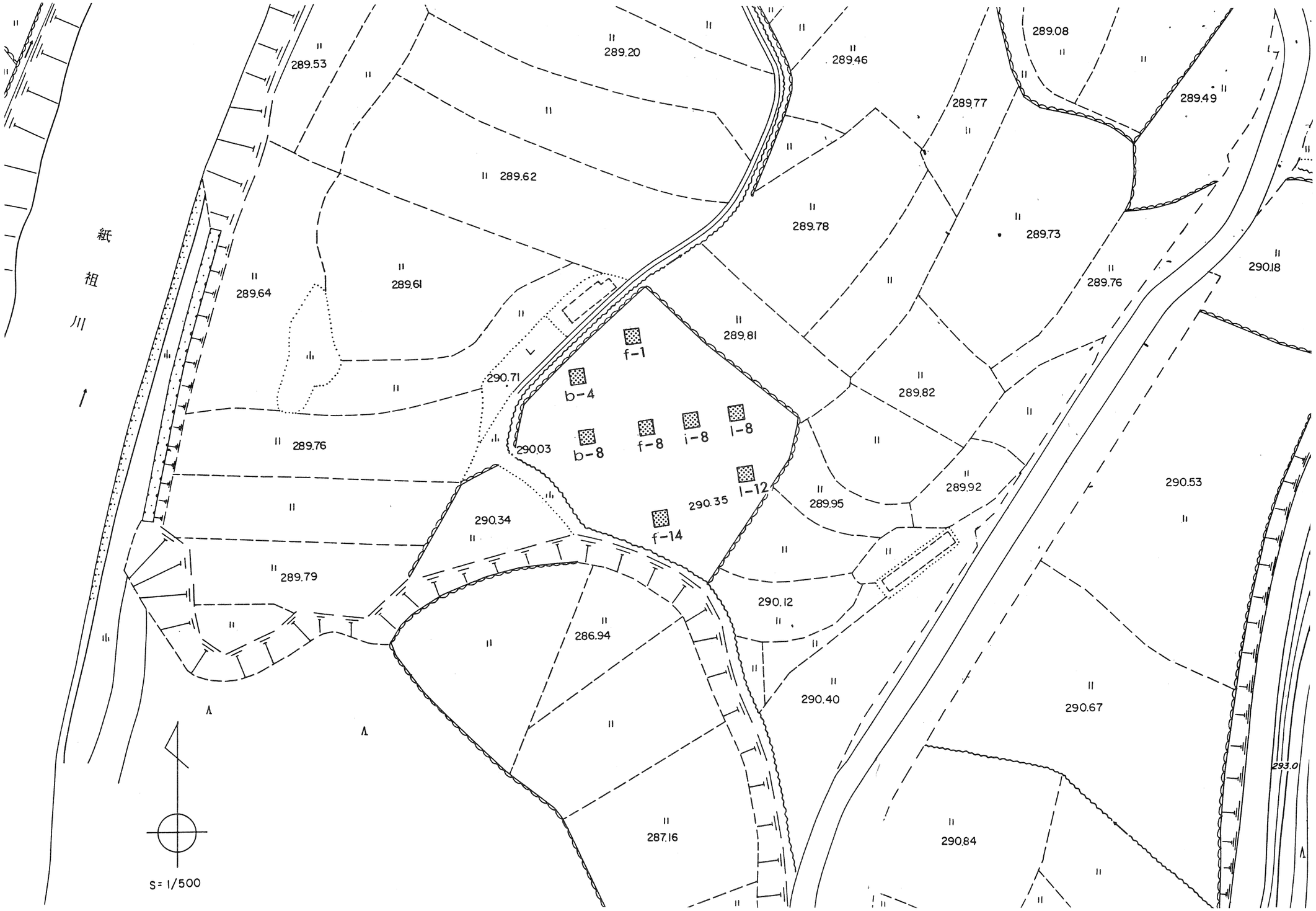
１．はじめに

石ケ坪遺跡は匹見町大字紙祖字乙佐原に所在する（第２図）。本遺跡は、1984年に農道建設の際に乙佐原の東側の地点で縄文中期・後期の土器や石器が出土して注目されるところとなった。遺跡は紙祖川の右岸に形成された幅広い河岸段丘上に位置し、標高290.35ｍである（図版６－１）。今次調査は遺跡の西側への広がりを確認することを主目的としたものである。

２．調査の概要

調査計画の概略を示すと、当初２×２ｍの方形調査区を５区設定したが、中途より遺構の確認の必要からさらに３区を加えて増設したので、計８調査区を設けたことになる。調査地の現況は休耕田である。ここに磁北を基線として中央にまず中心の調査区を設定し、その北端の点を基準に南北方向をａ、ｂ、ｃ…のアルファベット、東西方向を１、２、３…の数字で表示することにした。中央の基準区をｆ８区とし、東西・南北方向とも２ｍ間隔で点をとり、全区とも北西の杭点をもって調査区名とした。８区の区名は、ｆ１区、ｆ８区、ｆ14区、ｂ８区、ｉ８区、ｌ８区、ｌ12区、ｂ４区である（第９図）。調査は1987年８月22日より30日まで行なった。調査面積は32㎡である。

全体の層序は次の通りである。第１層は水田耕作土。第２層は茶褐色土層（２Ａ層）、濃灰色土層（２Ｂ層）、赤褐色土層（２Ｃ層）に細分する。第３層は黒色土層（３Ａ層）、黒褐色土で鉄分を含有する層（３Ｂ層）、第４層は明褐色土層（４Ａ層）、暗褐色土層（４Ｂ層）、暗黄色土層（４Ｃ層）、明黄色土層（４Ｄ層）に細分する。第５層は褐色砂礫層（５Ａ層）、黄色砂礫層（５Ｂ層）、



第9図 石ケ坪遺跡調査区配置図

黒褐色礫層（５Ｃ層）に細分する。第６層は、濃茶褐色土層（６Ａ層）、黒色礫層（６Ｂ層）、黒色土中に赤褐色土を含む層（６Ｃ層）、褐色礫層（６Ｄ層）に細分する（第10・11図）。

３．各調査区の概要

ｆ１区

休耕水田面の最北に設定したもので、現地標高は約290.76ｍである。

第１層　水田耕作土で、平坦に堆積しており、層厚は平均15cm。

第２層　第２層は色調によってＡ・茶褐色土層、Ｂ・濃灰色土層、Ｃ・赤褐色土層に分層したが、この調査区における層は２Ｃ層にあたり、赤褐色を呈する。平坦に堆積しており、層厚は平均６cm。陶器片が１点出土している。

第３Ａ層　黒色を呈し、若干の粘性があり、灰色のブロックを含む。層厚は平均15cm。

第３Ｂ層　黒褐色を呈する。粒が粗く、礫を多数含み、部分的に赤褐色の土を含む。層厚は平均12cmで平坦である。

第５層　本層は第５Ｂ層に該当する黄色を呈する砂礫質の層である。本区では第３Ｂ層上面から第５Ｂ層上部にかけて深さ約15cmの陥ち込みが確認された。陥ち込み中に埋まっている土は第３Ａ層の土である。陥ち込み中からの遺物の出土は認められなかった。

ｆ８区（図版７－２）

休耕田のほぼ中央に設定したもので、現地標高は約290.37ｍである。

第１層　耕作土で、ほぼ平坦に堆積しており、層厚は平均12cm。

第２Ａ層　茶褐色を呈し、層厚は平均５cm。

第２Ｂ層　濃灰色を呈し、若干の粘性がある。本層は第２Ａ層中に点在している。

第３Ａ層　黒色を呈し、第２Ｂ層と第４層の間に途切れ途切れに堆積している。

第４Ｂ層　暗褐色を呈する。東壁のみにみられる。層厚は、５～８cm。

第４Ａ層　明褐色を呈し、厚く堆積している。層厚は平均18cm（最大22cm、最小８cm）である。

第５Ｂ層　黄色を呈し、径５cmの小礫から30cmの石を含む礫層である。本区では、排土中から時期不明の三つ股の鉄鏃を採集した以外は遺物の出土は認められなかった。

ｆ14区

休耕田の最南部に設定したもので、現地標高は約290.35ｍである。

第１層　水田耕作土で、ほぼ平坦に堆積しており、層厚は約14cm。

第２Ｃ層　赤褐色を呈し、ほぼ平坦に堆積、層厚は平均８cm（最大20cm、最小５cm）である。

第２Ｂ層　濃灰色を呈し、厚さ５cmで第２Ｃ層中に含まれている。また第２Ｃ層から第５層上面

にかけて、東壁の南側に幅6㎝深さ10㎝の小さな陥ち込みが見られたが、内部からの遺物の出土はなく、人為的な陥ち込みであるかどうかは不明である。

第5B層　黄色を呈し、25㎝前後の石塊を多量に含む砂礫質の層である。本層からは、補修孔のある縄文土器片が1点出土している。

b 8区（図版6－2）

休耕田の西側に設定したもので、現地標高は約290.41ｍである。

第1層　水田耕作土で、ほぼ平坦に堆積、層厚は平均14㎝。

第4C層　暗黄色を呈し、層厚は平均20㎝（最大24㎝、最小4㎝）。本層からは、上げ底の縄文土器の底部片が出土している。

第4D層　明褐色を呈する。北壁のみにみられ、層厚は概ね10㎝程度である。

第5B層　黄色を呈し、25㎝前後の石を多量に含む砂礫質の層である。本層を8㎝程度掘り下げた段階で北東隅付近に陥ち込みらしきものが見られたので、確認のため、本区東壁沿いに幅約70㎝のサブトレンチを設定し、地表から90㎝まで掘り下げたが、明瞭な陥ち込みは認められなかった。

i 8区（図版8－1）

休耕田の中央やや東寄りに設定したもので、現地標高は約290.41ｍである。

第1層　水田耕作土で、ほぼ平坦に堆積し、層厚は概ね12㎝程度である。本層から須恵器が1点出土している。

第2C層　赤褐色を呈し、平坦に堆積している。層厚は、約6㎝である。

第3A層　黒色を呈する。やや厚く堆積しており、層厚は平均15㎝（最大30㎝、最小4㎝）である。本層からは、打製石斧が出土している。

第3B層　黒褐色を呈し、若干の鉄分を含む。層厚は、ほぼ6㎝である。

第5A層　褐色を呈する砂礫質の層で、北から南へ向かうほど厚さを増し、北壁では約10㎝程度であるが、南壁では、約30㎝以上となる。本層からは、打製石斧が出土している。

第5B層　黄色を呈し、径8～50㎝の石塊を多量に含む砂礫質の層である。

l 8区（図版8－2、9－1）

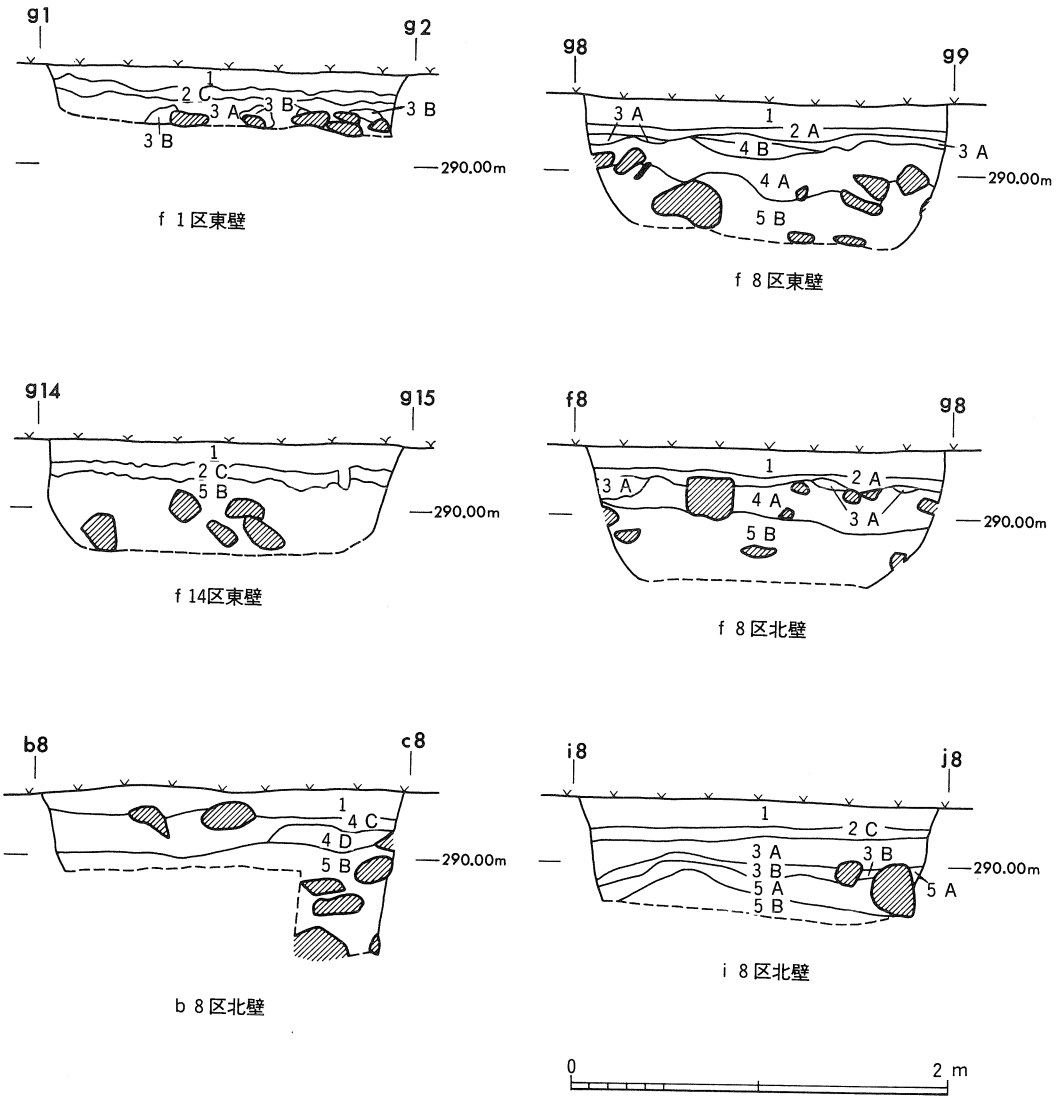
休耕田の最東部に設定したもので、現地標高は約290.47ｍである。

第1層　水田耕作土で、ほぼ平坦に堆積、層厚は平均12㎝。

第2C層　赤褐色を呈し、ほぼ平坦に堆積、層厚は約5㎝程度である。

第3A層　黒色を呈し、ほぼ平坦に堆積している。層厚は平均12㎝（最大18㎝、最小6㎝）。

第6層　本区では、他区に見られない層が存在する。これを第6層とし、色調によって、A・濃茶褐色層、B・黒色礫層、C・黒色土に赤褐色土を含む層、D・褐色礫層に分層した。



1. 耕作土
2A. 茶褐色土
2B. 濃灰色土（粘質）
2C. 赤褐色土
3A. 黒色土（粘質）
3B. 黒褐色土（鉄分を含む）
4A. 明褐色土
4B. 暗褐色土
4C. 暗黄色土
4D. 明黄色土
5B. 黄色砂礫層（粘質）

第10図　石ケ坪遺跡土層断面図（1）

第6D層　褐色を呈する礫層で、北壁のみで見られ、東側に第6B層を2分して切り込んでいる。

第6C層　黒色を呈し、ところどころに赤褐色の土を含む層で、西壁以外の壁に見られる。本層は、ほぼ平坦に、北壁中央付近から南壁東側に向かって堆積している。層厚は約8㎝である。

第6B層　黒色を呈する礫層で、本区北東隅付近で見られる。

第6A層　濃茶褐色を呈する層で、南壁と北壁にのみ見られる。本層は、幅約80㎝、深さ約40㎝で溝状に第5層に嵌入している。この範囲と性格を確認するために、休耕田面の南東隅にl 12区を設定した。l 8区の陥ち込みのある面に対応するl 12区の層の面を出したところ、東側から西側にゆるやかに傾斜しており、l 8区の溝状の陥ち込みが続いているかと思われたが、地表から約40㎝のところで、基底層の第5B層が現われたためl 8区の溝状の陥ち込みとl 12区との関連性は薄いと判断された。本区から遺物の出土はなく、溝状の陥ち込みの範囲、性格は不明である。

第4A層　明褐色を呈する。本区の北西隅辺りに厚く堆積し、層厚は約17㎝である。

第5C層　黒褐色を呈する砂礫質の層で、南東隅でのみ確認される。層厚は最大約35㎝である。

第5B層　黄色を呈する砂礫質の層である。

第5A層　褐色を呈する礫層である。

l 12区

休耕田の南東部にl 8区の溝状の陥ち込みの確認を行うために設定したもので、現地標高は約290.43ｍである。

第1層　水田耕作土で、ほぼ平坦に堆積しており、層厚は平均11㎝(最大15㎝、最小7㎝)である。

第2C層　赤褐色を呈し、ほぼ平坦に堆積。層厚は約7㎝（最大10㎝、最小3㎝）である。

第3A層　黒色を呈する層である。本層上部から土器片が1点出土しているが時期はわからない。

第5A層　褐色を呈する砂礫質の層で、層厚は大体11㎝程度である。本層は西側から東側へゆるやかに傾斜している。l 8区の溝状の陥ち込みに続く遺構は確認されなかった。

第5B層　黄色を呈する砂礫質の層である。

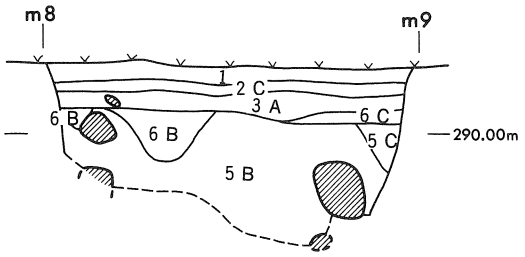
b 4区（図版7－1）

休耕田の北西隅に設定したもので、現地標高は約290.41ｍである。

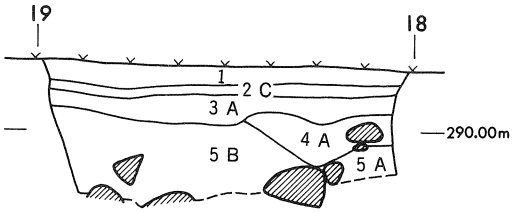
第1層　水田耕作土で、ほぼ平坦に堆積し、層厚は平均12㎝。

第2C層　赤褐色を呈し、下部にいくほど赤味を増す。層厚は平均8㎝（最大10㎝、最小6㎝）である。

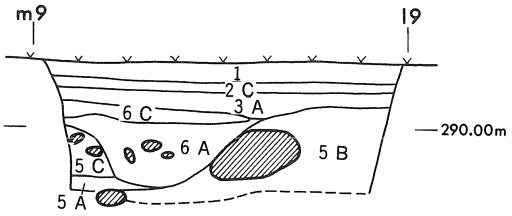
第3A層　黒色を呈する層で、厚く堆積し、第4層を切って第5層にまで陥ち込んでいる。陥ち込みは東壁と北壁で認められ、東壁に認められる陥ち込みは、幅32㎝、深さ35㎝のU字型、北壁で



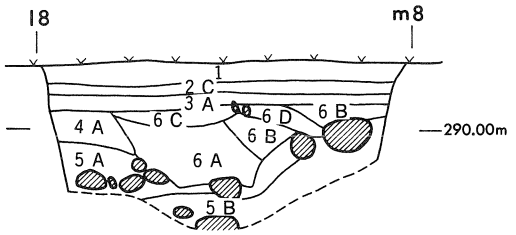
I 8区東壁



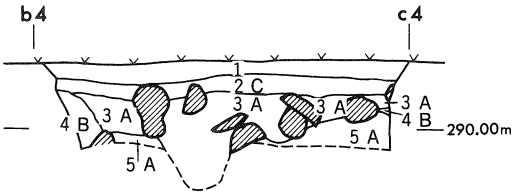
I 8区西壁



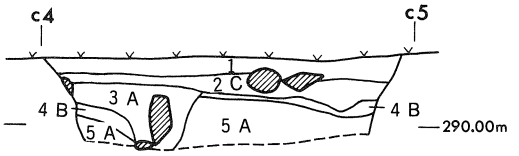
I 8区南壁



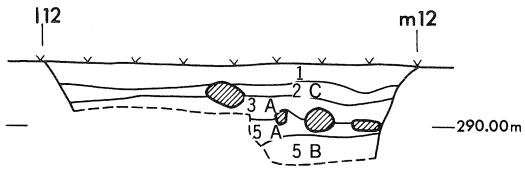
I 8区北壁



b 4区北壁

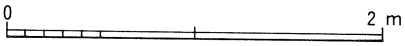


b 4区東壁



I 12区東壁

1. 耕作土
2C. 赤褐色土
3A. 黒色土（粘質）
3B. 黒褐色土（鉄分を含む）
6A. 濃茶褐色土
6B. 黒色礫層
6C. 黒色土（赤褐色土を含む）
6D. 褐色礫層
4A. 明褐色土
4B. 暗褐色土
5A. 褐色砂礫層
5B. 黄色砂礫層（粘質）
5C. 黒褐色礫層



第11図　石ケ坪遺跡土層断面図（2）

認められる陥ち込みは幅38㎝、深さ26㎝のＵ字形のものである。陥ち込み中からの遺物の出土は認められなかった。周囲には、20～30㎝の石がこの陥ち込みを囲むようにも見られるが、人為的に配置されたものとは考え難い。

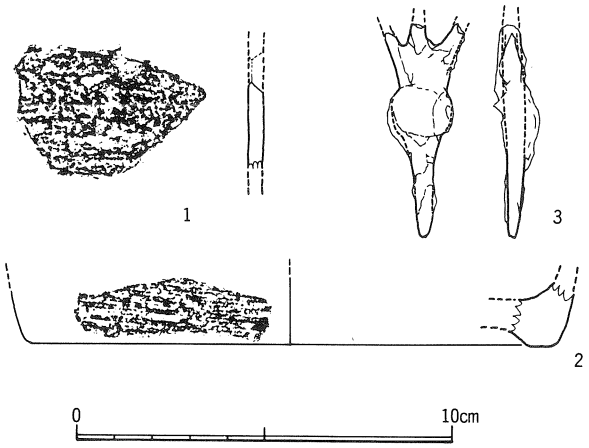
第４Ｂ層　暗褐色を呈する層である。

第５Ａ層　褐色を呈する砂礫質の層である。

４．出　土　遺　物

縄文土器（第12図１・２、図版９－２）

１は、ｆ14区第５Ｂ層から出土した補修孔のある土器片で、縄文晩期のものと考えられる。孔は外面から内面にかけて狭まり、直径は外面が11㎜、内面が5.5㎜である。器壁の厚さは約５㎜で、内面にはケズリ調整が、外面にはナデ調整が施されている。焼成は良好で胎土は密である。黄褐色を呈する。



第12図　石ケ坪遺跡出土縄文土器・鉄鏃実測図

２は、ｂ８区の第５層から出土したもので、縄文時代後・晩期のものと思われる。この土器片は底部で、外面に横方向の条痕文が、内面にはナデ調整がそれぞれ施されている。図上で復原すると底部径は約14.2㎝と考えられる。胎土は密で、焼成は良好である。黄褐色を呈し、内面はやや赤味を帯びる。

鉄製品（第12図３、図版９－２）

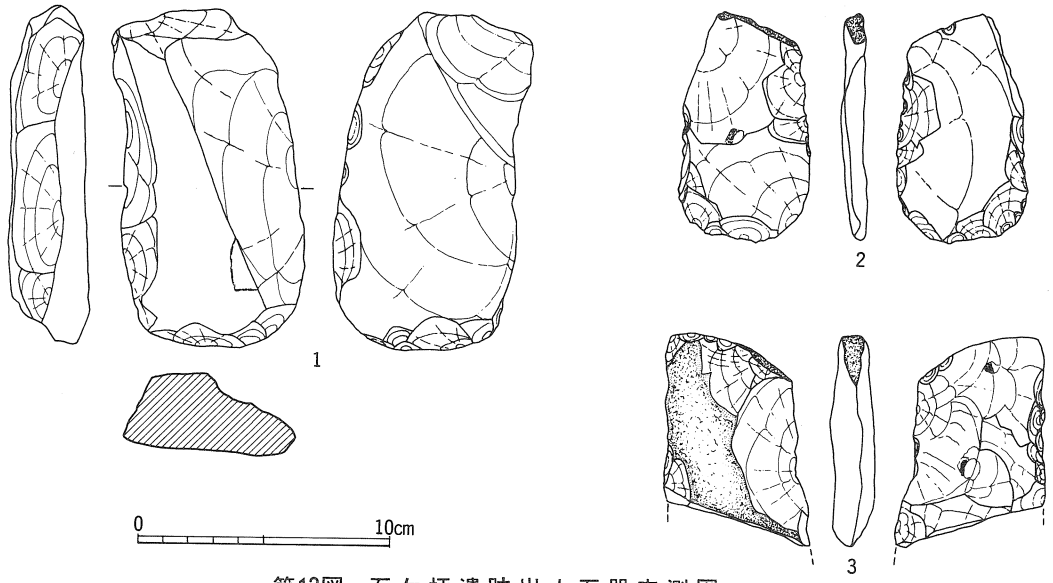
３は、ｆ８区排出土中から採集されたもので、時期は不明である。錆が厚く付着している。形は三つ股に分かれた鉄鏃で、股部は多少腐食し、先端部は欠けているため、もとの長さは不明である。現存の長さは約5.6㎝。三つ股部の断面は円形で、直径は４㎜程度である。

陶器

図版19－３－Ａはｆ１区出土の備前焼の壺の破片である。時期は不明。

石器（第13図、図版９－２）

石器は角閃石安山岩製の打製石斧が５点あまり出土した。



第13図　石ケ坪遺跡出土石器実測図

1はｉ８区第５Ａ層出土で、全長13.4㎝最大厚3.2㎝を測る粗雑なつくりの中形品である。一面には、研磨痕と思われる痕跡がみられる。２はｉ８区第３Ａ層出土で、全長約９㎝厚さ約１㎝を測る扁平な小形の完形品である。両面とも大きな剝離面が残り、側縁刃部に細かい剝離がみられる。３はｉ８区第５Ａ層出土のもので下半部が大きく欠損しており、一面と上端部には自然面を残すが、側縁には比較的ていねいな加工がみられる。（赤坂二史・西尾秀道）

第５章　木戸開中遺跡の調査

１．はじめに

木戸開中（きどあけなか）遺跡は、匹見町大字紙祖字荒木に所在する（第２図）。本遺跡は匹見川支流の紙祖川が形成した河岸段丘上に位置し、現況は休耕田である（図版10）。この辺りの段丘面は、匹見盆地でももっとも幅が広く、すぐ北方には町の中心の市街地が形成されている。微地形的な観察によると、本遺跡の付近は、段丘面上に東側の山丘から流出する細流により形成された崖錐状扇状地がみられ、その扇端部の湧水が遺跡成立の一条件をなすと思われる。遺跡の東側を通る匹見―六日市県道沿いには隣接地の水田ノ上遺跡（縄文晩期）をはじめ多くの縄文・弥生時代遺跡が確認されているが、それらの立地条件もほぼ同様に考えられよう。

調査に至る経緯は、前記のように匹見―六日市県道沿いに多くの遺跡が存在するという傾向から、休耕田であった現地を選定したわけである。調査の結果多量の遺物の出土があり、この推定の妥当性が確認されたことになった。

現地調査は1987年8月26日から30日までと、9月17日から19日までの延べ8日間を費して実施した。調査面積は36㎡である。

2. 調査の概要

調査にあたっては、まず当調査域のほぼ中央に基準点をとり、磁北を基線として北から南へ1、2、3…20、さらに西から東へa、b、c…sの方形区画（2×2m）を設定し、およそ調査可能範囲の全域を覆うことができるようにした。また各調査区は北西隅の杭名をもって呼ぶこととする（第14図）。

今回の調査においては明確な遺構は確認できなかったが、9箇所の調査区のすべてから遺物が出土した。土器はj9区、j13区、j17区、g9区から多く出土しており、その他の調査区では数片のみにとどまっている。各調査区とも第3層および第4A、第4B層に土器の集中的包含が認められたが、それらの土器は縄文土器から土師器・須恵器にいたるまでの各時代のものが混在して見出されているので、層位による明確な把握は行なうことは少々困難であった。また第2層と第3層からは近世の陶磁器が出土している。木製品・木片類は第2層下面に密集しており、第1層と第3層からもわずかではあるが出土している。調査区でいえば、d9区を除きすべての調査区に分布している。

層序は概ね次の通りである。上部より第1層は水田耕作土、第2層は灰褐色土、第3層は黒色土、第4層は黒茶色土、第5層は黄褐色砂礫層となる。さらに第4層は粘性、色調等によりA～Cに細分される（第15・16図）。

3. 各調査区の概要

j9区（図版12―1、14―2）

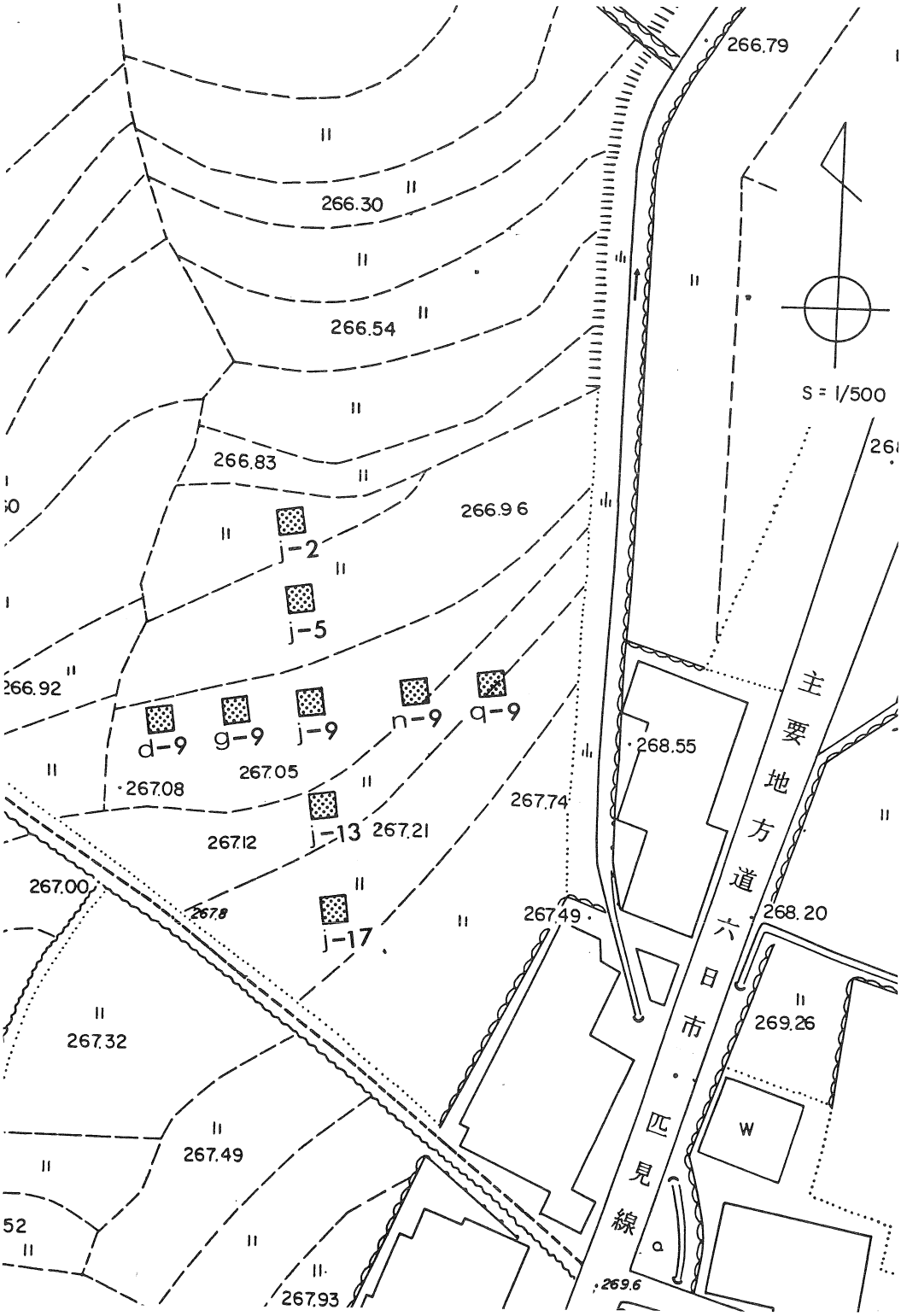
調査区のほぼ中央に設定したもので、現地表面は標高約266.24mである。

第1A層　水田耕作土で暗茶褐色を呈する。厚さは平均30cmで、ほぼ平坦。

第2層　灰褐色を呈し、粘性があり、しまっている。厚さは平均30cm、ほぼ水平に堆積している。第3層との境では、数片の土器と木製品等が出土した。

第3層　黒褐色を呈し粘性がある。層上面には5～8cm大の小礫が敷きつめられたような状態で存在している。厚さは平均10cm、ほぼ水平に堆積している。この層には弥生土器・須恵器・土師器が混然と包含されており、下層との境では石器が1点出土した。また、桃の種子も出土している。

第4A層　黒茶色を呈するもののうち、より真黒色に近く粘性が最も強いもの。厚さは5～10cm



第14図　木戸開中遺跡調査区配置図

で、ほぼ水平に堆積している。土器が数点出土した。

第4B層　黒茶色を呈するもののうち青灰色味を帯びたもの。粘性は中位で鉄分が浸透している。厚さは4～15cmとかなりのばらつきがみられ、わずかに南から北に傾斜している。なお北壁断面にみられるように、くさび状のピットおよびゆるやかな陥ち込みが存在したが、明確な遺構とは判断できなかった。縄文土器、弥生土器、石器等が出土した。

第4C層　黒茶色を呈するもののうち茶色味が強いもの。粘性は少なくやや砂質で鉄分が浸透している。厚さは20～40cmとかなりのばらつきがみられ、若干北から南に傾斜している。この層からは遺物は出土していない。

第5層　黄褐色を呈し5～30cmの大小さまざまな石塊を多量に含む砂礫層で、基底の礫層と考えられる。

j5区（図版11―2）

j9区の北方6mの地点に設定したもので、現地表面は標高約266.13m。

第1A層　水田耕作土で、暗茶褐色を呈する。厚さは20～35cm、ほぼ平坦。

第2層　灰褐色を呈し、土に粘性があり、しまっている。j9区の第2層と同一の層と考えられる。厚さは10～20cmで若干南から北に傾斜している。第3層との境で土器が1片と多量の木製品等が出土した。

第3層　黒褐色を呈し粘性がある。j9区の第3層と同一の層と考えられる。厚さは平均12cm、ほぼ水平に堆積。土器が2片出土した。

第4A層　黒茶色を呈する。j9区の第4A層と同一の層と考えられる。厚さは2cmあまり、ひじょうに薄く、東壁断面では途切れている。遺物は出土しなかった。

第4B層　黒茶色を呈する。j9区の第4B層と同一の層と考えられる。厚さは平均10cm、わずかに南から北に傾斜しており、下層との境で土器が2片出土した。

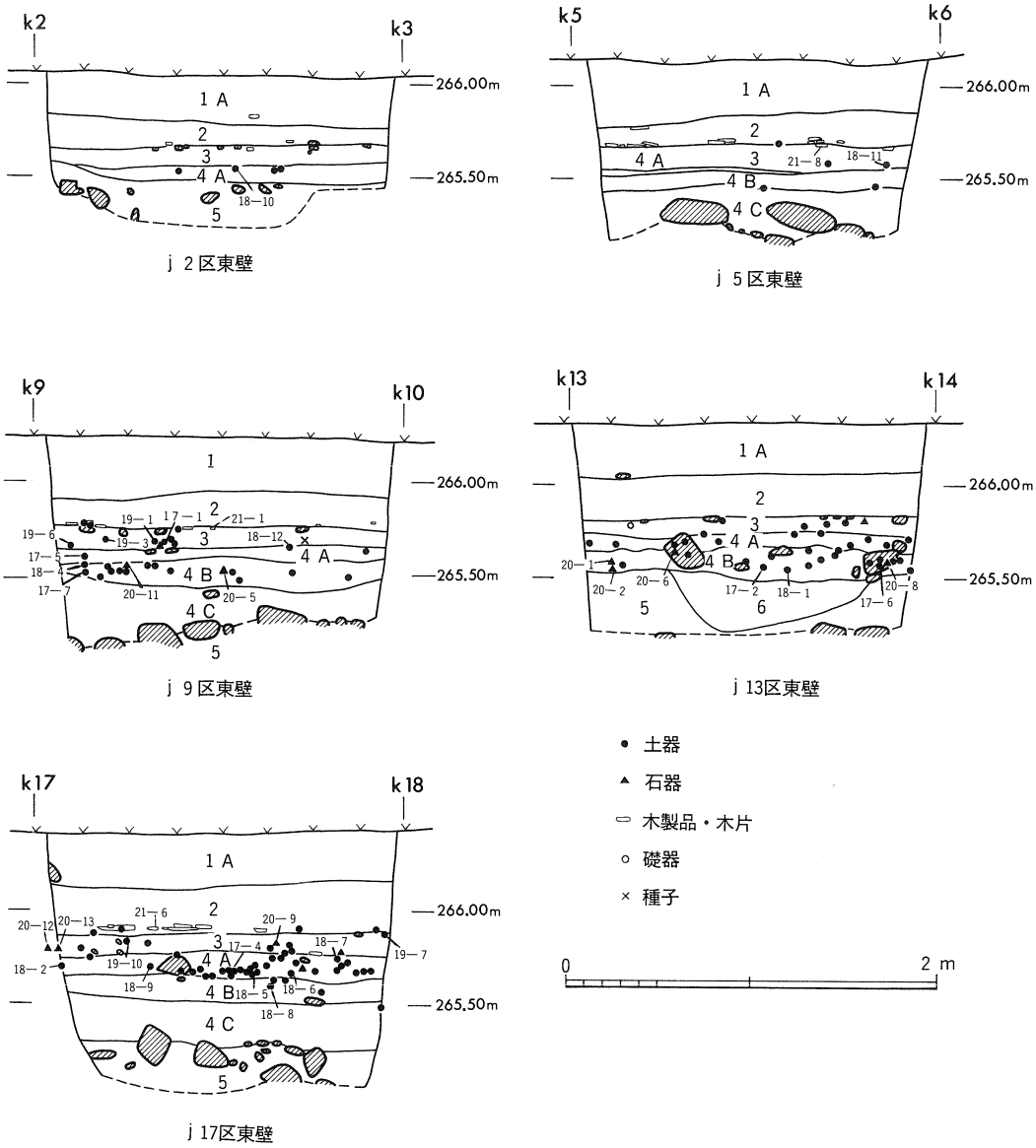
第4C層　黒茶色を呈する。j9区の第4C層と同一の層と考えられる。厚さは20～30cm、40cm大の石を含み、ほぼ水平に堆積している。

j2区（図版11―1）

j9区の北方12mの地点に設定したもので、調査区の中では最も低いレベルになっている。現地表面が示す標高は約266.04mである。

第1A層　水田耕作土で暗茶褐色を呈する。厚さは平均25cmでほぼ平坦である。木片が1点ばかり出土した。

第2層　灰褐色を呈し、土に粘性があり、しまっている。j9区の第2層と同一の層と考えられる。厚さは10～15cmでわずかに北から南に傾斜している。下層との境で木製品等が数片出土した。



1A．耕作土（暗茶褐色）
2．灰褐色土（粘性あり）
3．黒褐色土（粘性あり）
4A．黒茶色土のうち、より黒味を帯び、粘性が最も強いもの
4B．黒茶色土のうち、青灰色味を帯び、やや粘性のもの
4C．黒茶色土のうち、茶色味を帯び、粘性の弱いもの
5．黄褐色砂礫層
6．暗茶褐色土

第15図　木戸開中遺跡土層断面図（1）

第3層　黒褐色を呈し粘性がある。層上面には2～5㎝大の小礫が敷きつめたように存在する。j 9区の第3層と同一の層と考えられる。厚さは平均10㎝で、ほぼ水平。

第4A層　黒茶色を呈する。j 9区の第4A層と同一の層と考えられる。厚さは5～10㎝、わずかに南から北に傾斜している。層上面で土器が数点出土した。

第5層　黄褐色を呈し、5～15㎝大の石塊を含む、j 9区の第5層と同一の層と考えられる。

j 13区（図版12―2）

j 9区の南方6ｍの地点に設定したもので、現地表面は標高約266.32ｍである。

第1A層　水田耕作土で暗茶褐色を呈する。厚さは平均25㎝で、ほぼ平坦。

第2層　灰褐色を呈し、土に粘性があり、しまっている。j 9区の第2層と同一の層と考えられる。厚さは平均20㎝、南から北に若干傾斜している。下層との境で木製品等が出土した。

第3層　黒褐色を呈し粘性がある。層上面には2～5㎝大の小礫が敷きつめられたように存在している。j 9区の第3層と同一の層と考えられる。厚さは平均10㎝でわずかに南から北に傾斜している。この層からは土器と石器が出土した。

第4A層　黒褐色を呈する。j 9区の第4A層と同一の層と考えられる。厚さは6～10㎝、第4B層との境に若干の凹凸がみられるが、ほぼ水平に堆積。土器片が数点出土した。

第4B層　黒茶色を呈する。j 9区の第4B層と同一の層と考えられる。厚さは10～20㎝で比較的水平に堆積。この層では縄文土器と弥生土器が混在しており、石器も打製石斧等数点がまとまって出土した。

第5層　黄褐色を呈する。j 9区の第5層と同一の層と考えられる。

第6層　暗茶褐色を呈する。第5層に深さ最大60㎝と大きく陥ち込んでいるが、遺構としては確認できなかった。また遺物も出土していない。

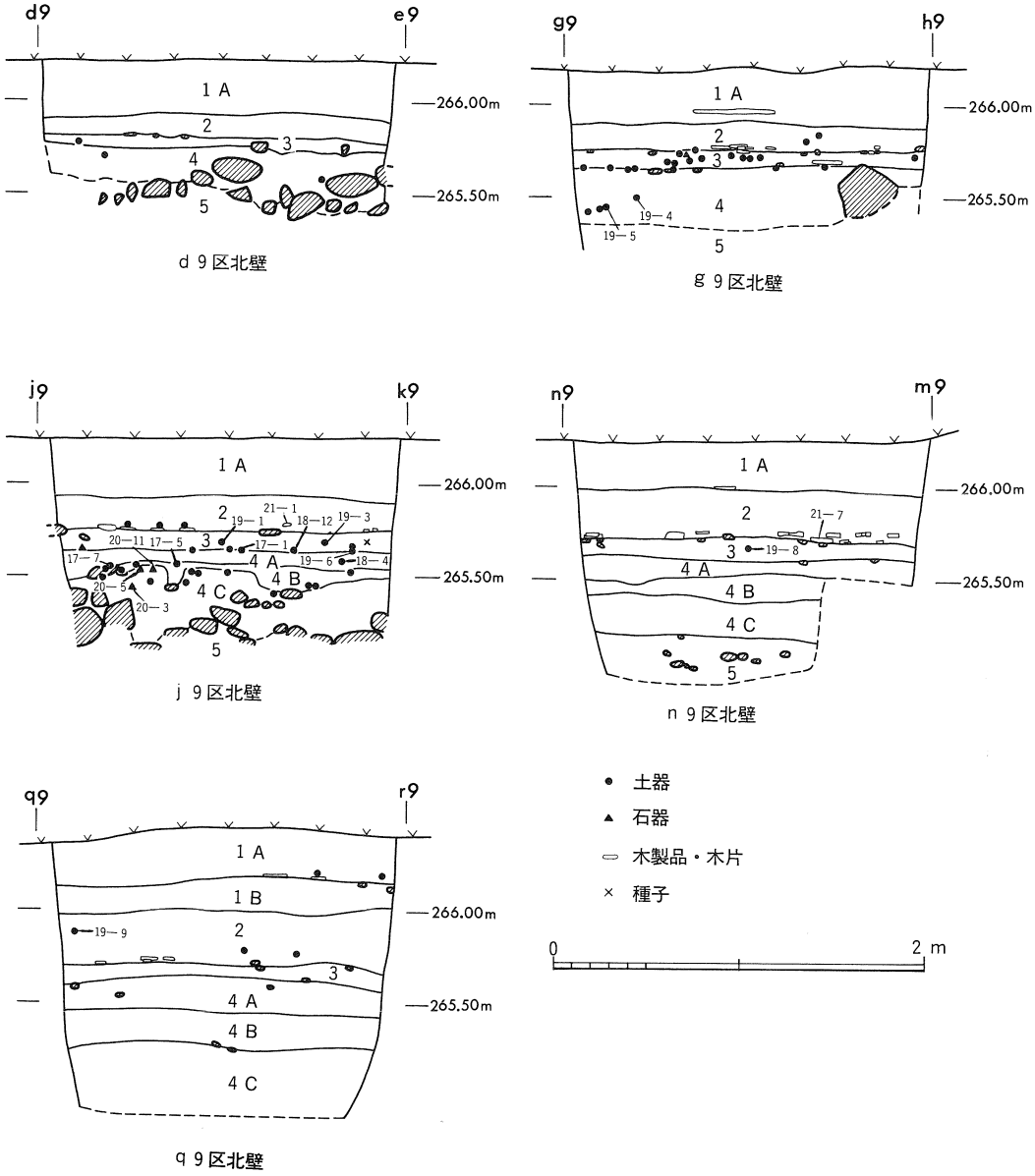
j 17区（図版13―1）

j 9区の南方14ｍの地点に設定したもので、調査区の最も高い位置にあたる。現地表面は標高266.40ｍである。

第1A層　水田耕作土で暗茶褐色を呈する。厚さは25～30㎝でほぼ平坦。

第2層　灰褐色を呈し、土に粘性があり、しまっている。j 9区の第2層と同一の層と考えられる。厚さは平均25㎝で、若干南から北に傾斜している。層下面では木製品等がかなりまとまって出土した。

第3層　黒褐色を呈し、土に粘性がある。j 9区第3層と同一の層と考えられる。厚さは平均10㎝で、ほぼ水平に堆積。須恵器および石器が数点出土した。また木片も一片ではあるが下層との境で検出された。



1A．耕作土（暗茶褐色）
1B．暗褐色土
2．灰褐色土（粘性あり）
3．黒褐色土（粘性あり）
4A．黒茶色土のうち、より黒味を帯び、粘性が最も強いもの
4B．黒茶色土のうち、青灰色味を帯び、やや粘性のもの
4C．黒茶色土のうち、茶色味を帯び、粘性の弱いもの
5．黄褐色砂礫層

第16図　木戸開中遺跡土層断面図（2）

第4A層　黒茶色を呈する。j 9区の第4A層と同一の層と考えられる。厚さは10～15cmでほぼ水平に堆積。縄文土器、弥生土器等かなりの量の土器片がまとまって出土した。

第4B層　黒茶色を呈する。j 9区の第4B層と同一の層と考えられる。厚さは10～15cmでほぼ水平に堆積している。土器を包含していた。

第4C層　黒茶色を呈する。j 9区の第4C層と同一の層と考えられる。厚さは平均25cmで、若干北から南に傾斜している。層上面では1片だけ土器が出土した。

第5層　黄褐色を呈し、径5～20cm大の大小さまざまな石塊を多量に含む。j 9区の第5層と同一の層と考えられる。

g 9区（図版14—1）

j 9区の西方4mの地点に設定したもので、現地表面は標高約266.19mである。

第1A層　水田耕作土で暗茶褐色を呈する。厚さは平均30cmでほぼ平坦。木片が包含されていた。

第2層　灰褐色を呈し、土に粘性があり、しまっている。j 9区の第2層と同一の層と考えられる。厚さは平均15cmで、ほぼ水平に堆積。下層との境では木製品等が多数出土した。

第3層　黒褐色を呈し、土に粘性がある。層上面には2～5cm大の小礫が敷きつめられたように存在している。j 9区の第3層と同一の層と考えられる。厚さは平均10cmでほぼ水平に堆積している。土器・石器・木製品等を包含していた。

第4層　黒茶色を呈する。A～C層への明確な分層はできなかった。ほぼ水平に堆積し、土師器等の土器片が検出された。また、桃の種も出土している。

d 9区（図版13—2）

j 9区の西方10mの地点に設置したもので、現地表面は標高約266.21mである。

第1A層　水田耕作土で暗茶褐色を呈する。厚さは平均30cmでほぼ平坦。

第2層　灰褐色を呈し、粘性があり、しまっている。j 9区の第2層と同一の層と考えられる。厚さは10～15cmでほぼ水平に堆積。遺物は包含されていなかった。

第3層　黒褐色を呈し、土に粘性がある。層上面には2～5cm大の小礫が敷きつめられたように存在している。j 9区の第3層と同一の層と考えられる。4～8cmの薄い層で、ほぼ水平に堆積している。下層との境に1片だけ土器が出土した。

第4層　黒茶色を呈する。A～C層に明確に分層することはできなかったが、わずかばかり掘り下げたところで、すでに5～30cm大の大小さまざまな石塊が多量に含まれている。ほぼ水平に堆積。土器2片が出土した。

n 9区（図版15—1）

j 9区の東方6 mの地点に設定したもので、現地標高は約266.24 mである。

第1A層　水田耕作土で暗茶褐色を呈する。厚さは平均25cmでほぼ平坦である。下層との境で木片が1点出土した。

第2層　灰褐色を呈し、土に粘性があり、しまっている。j 9区の第2層と同一の層と考えられる。厚さは平均25cmで、ほぼ水平に堆積している。下層との境では木製品等が集中して出土した。

第3層　黒褐色を呈し粘性がある。層上面には径2～5 cm大の小礫が敷きつめられたように存在する。j 9区の第3層と同一の層と考えられる。厚さは8～13cmあり、ほぼ水平に堆積。土器が1片出土した。

第4A層　黒茶色を呈する。j 9区の第4A層と同一の層と考えられる。厚さは5～15cm、ほぼ水平に堆積。

第4B層　黒茶色を呈する。j 9区の第4B層と同一の層と考えられる。厚さは5～15cmで、層の上部に若干の凹凸がみられるが、ほぼ水平な堆積としてよい。

第4C層　黒褐色を呈する。j 9区の第4C層と同一の層と考えられる。厚さは平均20cmで、ほぼ水平に堆積。A、B、C層とも遺物は出土しなかった。

第5層　黄褐色を呈している。j 9区の第5層と同一の層と考えられる。

q 9区（図版15—2）

j 9区の東方12 mの地点に設定したもので、現地表面は標高約266.30 mである。

第1A層　水田耕作土で、暗茶褐色を呈する。厚さは25～30cmで東から西に若干傾斜している。下層との境に土器および木片が検出された。

第1B層　暗褐色を呈する。暗黄褐色の砂が混ざっており、客土によるいわゆる盛土層と考えられる。厚さは10～20cmでわずかに東から西へ傾斜している。遺物は包含されていなかった。

第2層　灰褐色を呈し、土に粘性があり、しまっている。j 9区の第2層と同一の層と考えられる。厚さは平均30cmでほぼ水平に堆積している。下層との境では木製品等が出土しており土器も数点検出された。

第3層　黒褐色を呈し粘性がある。層上面に5 cm大の小礫が点在する。j 9区の第3層と同一の層と考えられる。厚さは5～10cmでほぼ水平に堆積している。遺物は包含されていなかった。

第4A層　黒茶色を呈する。j 9区の第4A層と同一の層と考えられる。厚さは平均15cmでほぼ水平に堆積。遺物は包含されていなかった。

第4C層　黒茶色を呈する。j 9区の第4C層と同一の層と考えられる。ほぼ水平に堆積。石器が1点のみ出土した。

4. 出　土　遺　物

縄文土器（第17図、図版17―１）

今回の調査における縄文土器の出土総数は小破片を含め20点弱で、そのほとんどが縄文晩期と推定される。そのうち部位がわかるものを中心に７点を図示した。調査区別の内訳ではｊ９区第３・４Ａ・４Ｂ層、ｊ13区第４Ｂ層、ｊ17区第４Ａ層、ｇ９区第４層から出土している。

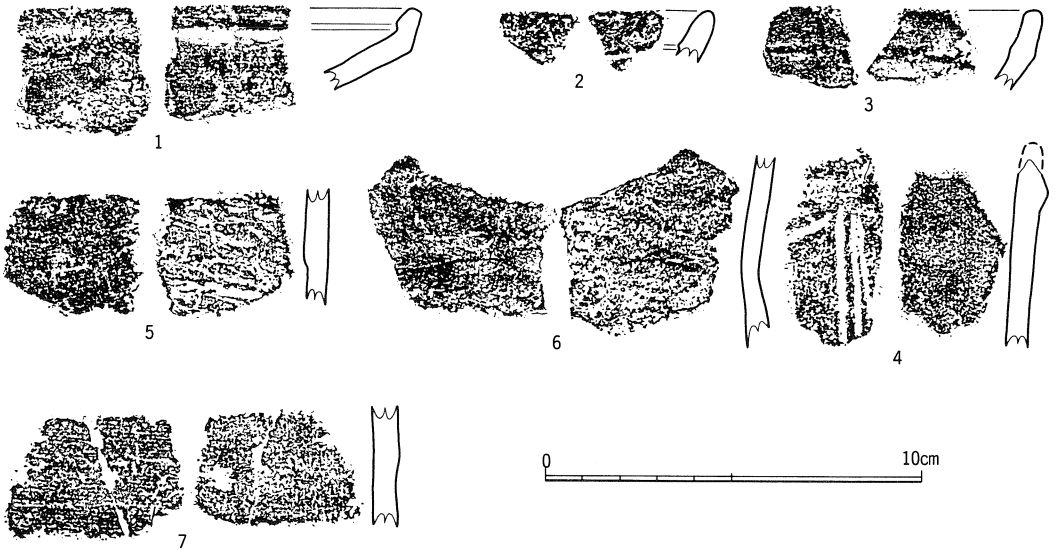
１はｊ９区第３層出土の浅鉢形精製土器である。口縁内側に段をもつ。外面には口縁にそって平行沈線が施されているようであるが、風化が著しく詳細は不明である。内面は研磨されて黒褐色を呈する。口縁部の特徴から縄文晩期でも前半のものと考えられる。

２はｊ13区第４Ｂ層出土の精製土器口縁部で、内側に細沈線がめぐらされている。外面は黒褐色で、ナデ調整が施されている。

３はｊ13区排土から採取された精製土器口縁部である。内外面にナデ調整が行なわれており、内面には指圧痕がある。

４はｊ17区第４Ａ層出土の精製土器片である。上部は欠けているが口縁部と思われ、わずかに突帯状のふくらみがみられる。外面にはヘラによる沈線が施されている。[1] 風化が著しく、調整は不明である。

５はｊ９区第４Ａ層出土の粗製土器であるが、小破片のため部位は不明である。内外面ともに茶



第17図　木戸開中遺跡出土縄文土器実測図

褐色で条痕調整が施されている。

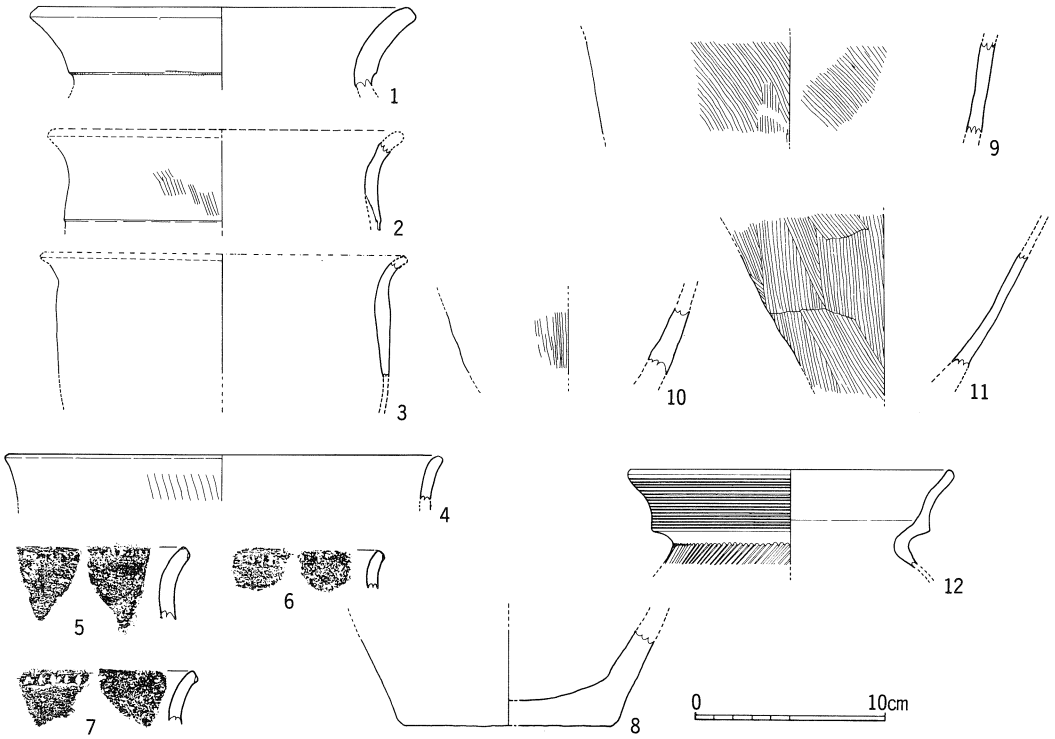
6はｊ13区第４Ｂ層出土の粗製深鉢形土器で頸部片とみられる。わずかに内側に屈折し、内外面に５と同様の条痕調整が施されている。外面は茶褐色で内面には炭化物状のものが付着し、黒褐色である。

7はｊ９区第４Ｂ層出土の粗製土器で、内外面ともに茶褐色を呈し、内面には条痕、外面には条痕→ナデの調整が施されている。また、ナデ調整が粗雑なため約１㎝強の幅で粘土紐の跡が明瞭にうかがえる。外面には指圧痕がある。

弥生土器（第18図、図版18―１）

1はｊ13区第４Ｂ層出土の弥生前期の壺形土器の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁端部は平坦に仕上げられ、頸部外面に明瞭な段を有している。段の切れ目にはハケ目工具による小さな列点状の刺突痕が認められる。胎土は２㎜大の石英粒子等を含み、焼成は良好。色調は赤褐色を呈し、外面には鉄分が付着して黒色を呈する部分がある。

2はｊ17区第４Ａ層から出土した弥生前期の甕形土器片の頸部から胴部にかけての破片で、下端に浅い段が認められ、内面には擬口縁の剝離面が残っている。調整は外面頸部をヨコナデ、胴部はハケ目を施す。胎土は２㎜程度の石英粒子等が含まれ、焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面が淡黄褐色を呈している。



第18図　木戸開中遺跡出土弥生土器実測図

3はｊ17区第4層出土。弥生前期の甕形土器片で頸部から胴部にかけてのものである。外面はナデ調整と思われるが、磨滅が激しく断定はできない。内面には横位の線状調整痕がみられる。胎土には1～2㎜大の石英が含まれる。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好。一部には黒灰色の焼成痕が残っている。

4はｊ9区第4Ａ層出土。弥生前期の甕形土器の口縁部片で、端部は平坦に仕上げられている。調整は外面には粗いハケ目が施され、口縁直下はヨコナデしている。胎土には2㎜大の石英粒子等を含み、焼成は普通。色調は黄白色を呈している。

5はｊ17区第4Ａ層出土。弥生前期の甕形土器口縁部の破片である。ゆるく外反した口唇部下端に刻み目を入れている。調整は内外面ともに横位のナデ痕が認められた。胎土には1～2㎜の石英粒子等が含まれる。焼成良好、色調は黄褐色を呈するが、外面上部は黒ずむ。

6はｊ17区第4Ａ層出土。弥生前期の甕形土器口縁部の細片。5と較べてやや薄目の器壁厚。口唇部下端に刻み目を施す。胎土に2～3㎜程度の砂粒を含む。焼成は普通で黒褐色を呈している。

7はｊ17区第4Ａ層出土。弥生前期の甕形土器片である。ゆるく外反する口縁の口唇部下端に刻目を施す。口縁端部がわずかに肥厚している。内面にはヨコナデ痕が認められる。黄褐色を呈し、焼成は普通。胎土には大きな石英粒子等が少量含まれる。

8はｊ17区第4Ｂ層出土。弥生前期か中期の甕形もしくは壺形土器の底部片である。調整は風化が著しく不明。胎土は2～3㎜大の石英粒子等を含み、焼成は良好である。色調は内面黒褐色、外面淡褐色を呈している。

9はｊ17区第4Ａ層出土、甕形または壺形土器の胴下部片である。調整は内外面ともにハケ目調整を施す。胎土は2～3㎜の石英粒子等を含み、焼成普通。色調は内面は黒褐色で外面は赤褐色を呈している。

10はｊ2区第4Ａ層出土。甕形土器か壺形土器の胴下部の弥生土器片である。調整は、外面にハケ目調整を施す。胎土は2㎜大の石英粒子等を含む。焼成は良好で薄黄灰色を呈している。

11はｊ5区第3層出土。甕形土器の胴部下半部片である。調整は、外面に縦方向のハケ目調整が施される。胎土は2㎜大の砂粒子を含んでおり、焼成は良好。色調は内面は暗黄灰色で、外面は黄褐色を呈している。

12はｊ17区第4Ａ層出土。弥生後期の甕形土器片である。口縁部は大きく外反する複合口縁で、表面に櫛状工具による17条の平行沈線文が、頸部にはヘラ状工具による連続列点文がそれぞれ施される。また内面頸部以下にはヘラ削り痕がみられる。胎土は2㎜程度の石英粒子等を含み、焼成は良好で、色調は外面が茶褐色、内面が淡茶褐色を呈している。

土師器（第19図１～５図版18―２）

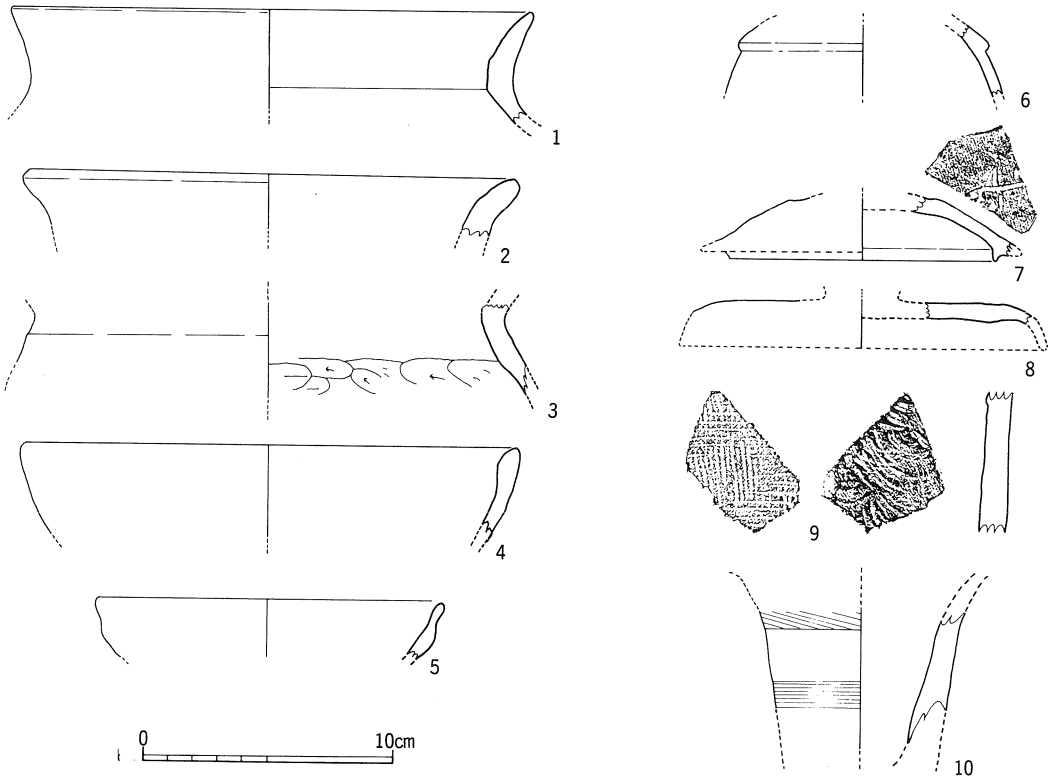
１はｊ９区第３層出土。甕形土器の口縁部から肩部にかけての破片である。調整は、外面と内面頸部まではヨコナデ、内面頸部より下部にはヘラケズリが施されている。胎土は密で、焼成は良好。色調は内面は赤茶色、外面は乳赤茶色を呈する。風化が著しい。

２はｇ９区第４層出土。甕形土器の口縁部片で器壁厚が1.3㎝と厚手。調整は内外面ともヨコナデを施す。胎土は密で、焼成良好。色調は内面は濃灰色、外面は黒色を呈している。

３はｊ９区第３層出土。壺形土器の肩部片と思われる。外面にはヨコナデ後に赤色顔料を塗布した形跡が認められる。内面の上部はヨコナデ、下部は横・斜位のケズリ痕がみられる。胎土に大きな砂粒子を含み、焼成良好。暗茶褐色を呈する。

４はｇ９区第４層から出土。坏の口縁部の破片である。調整は内面にヨコナデが施されている。胎土は３㎜程度の砂粒子を含んでいる。色調は外面が黒色、内面が茶褐色を呈している。

５はｇ９区第４層から出土した土師質土器の皿の口縁部片である。調整は全面にヨコナデが施されている。胎土は密で、色調は黄茶褐色を呈している。



第19図　木戸開中遺跡出土土師器・須恵器実測図

須恵器（第19図6～10、図版18―2）

6はｊ9区第3層出土の蓋付の蓋片である。稜が明瞭に認められ、山本編年Ⅰ期に含めうるものであろう[2]。調整は内外面とも回転ナデが施されている。胎土は密で、焼成良好。色調は内面は灰色、外面は黒灰色を呈している。

7はｊ17区第3層出土。蓋杯の蓋の破片である。端部下に身受けの突起がある。柳浦編年Ⅰ期に属すると思われる[3]。調整は内面に回転ヨコナデが施され、外面には十字のヘラ記号が認められる。胎土は密で焼成は良好。色調は外面灰白色、内面灰色を呈している。

8はｎ9区第3層から出土。蓋の破片である。調整は内外面に回転ヨコナデが施されている。胎土は密で、焼成は良好。色調は灰色を呈している。

9はｑ9区第2層出土。大形甕の破片と思われる。調整は内面にはタタキのあて具の痕跡が顕著で、外面はタタキ目が施されている。胎土は密で、焼成は良好。色調は内面は白灰色で、外面は黒灰色を呈している。

10はｊ17区第3層出土。壺あるいは平瓶の頸部破片と思われる。調整は内面にヨコナデ、外面に横・斜め方向のナデが施されている。胎土は密で、焼成はきわめて良好である。色調は灰色を呈している。

石器（第20図、図版17）

石器は石斧、スクレイパー、磨石、および剝片等が検出された。

1はｊ13区第4Ｂ層出土の角閃石安山岩製打製石斧である。全長17.4㎝、最大幅7.2㎝を測る大形品で短冊形を呈する。一面には一部自然面を残し、周縁はていねいな剝離調整を施している。

2は1と伴出の角閃石安山石製打製石斧である。側縁部上半は欠損しており、一面には扁平な自然面が残り、両面とも周縁に剝離調整を施す。

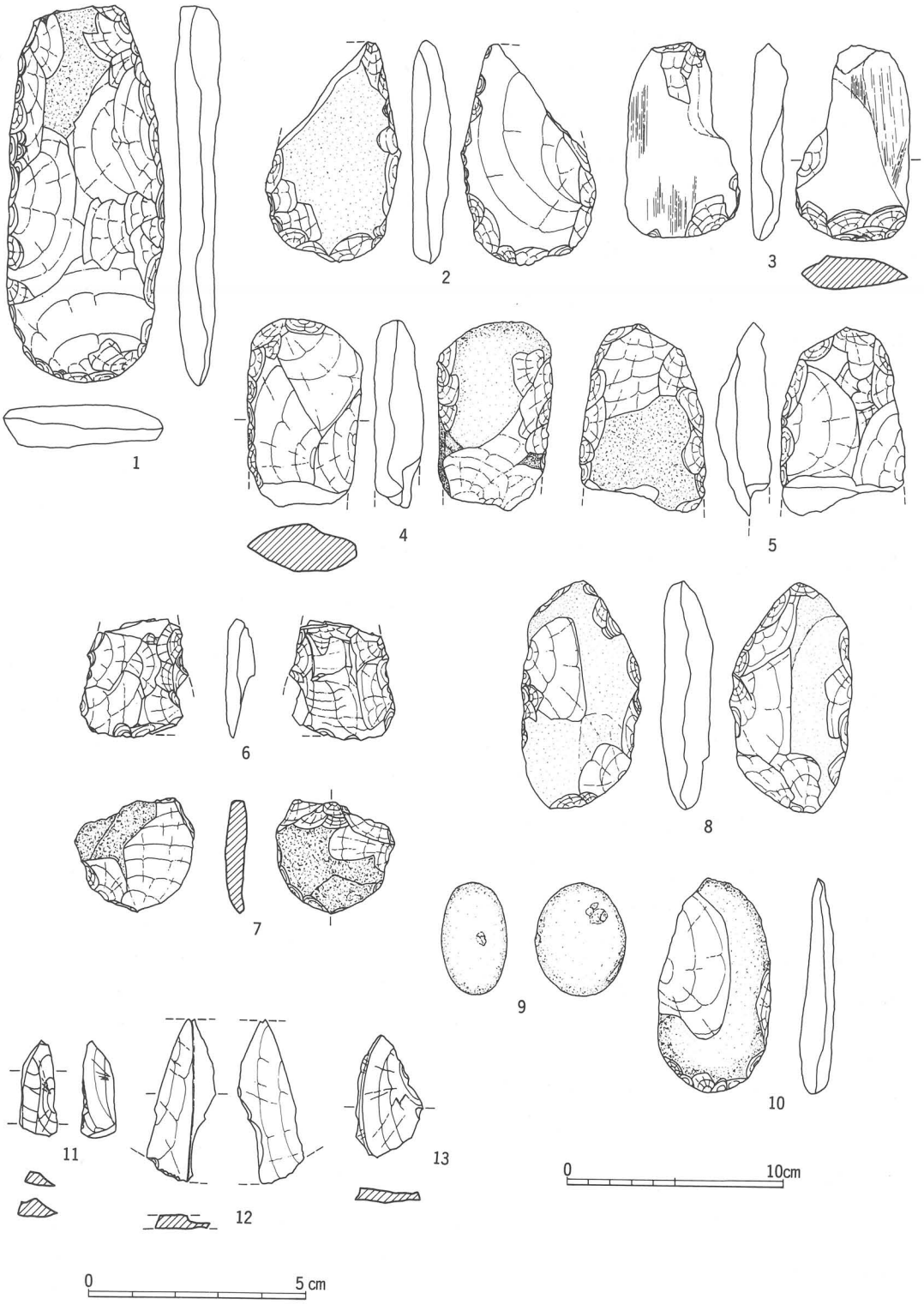
3はｊ9区第4Ｃ層出土の角閃石安山岩製の局部磨製石斧である。全長約9㎝の小形の完形品で、刃部の一面には剝離調整を施し、両面ともていねいに研磨され、とくに一側縁は鋭く研磨されている。

4はｊ2区排土より採取されたもので、下半部が欠損しているが石斧片とみられる。材質は角閃石安山岩で、一面には自然面を残す。

5はｊ9区第4Ｂ層出土のもので、石斧片とみられる。角閃石安山岩製で下半部は欠損しており、側面はゆるく弧状を描く。

6はｊ13区第4Ｂ層上部出土の流紋岩製打製石斧である。側縁部下部と上半部は欠損しており、刃部のみ残る。周縁部にはていねいに剝離調整が施されている。

7はｊ13区排土より採取されたもので、酸性凝灰岩よりなるスクレイパーである。厚さ約0.8㎝



第20図　木戸開中遺跡出土石器実測図

の扁平な材質で、両面ともに自然面が残り、周縁部に大きな剝離がみられる。

8はｊ13区第4Ｂ層出土のものである。材質は角閃石安山岩で、全長10.5cm、最大厚2.3cmを測り、平面形は楕円形を呈す。周縁部に剝離調整を施し、両面には自然面を残している。器種は不明瞭だが、スクレイパーか石斧の可能性がある。

9はｊ17区第3層出土のもので、明確な磨痕は確認することができないが、磨石と思われる。材質は角閃石安山岩で長径5.2cm、短径4.2cmを測り、重量70gである。

10はｑ9区第4Ｃ層出土の剝片である。角閃岩安山岩製で、下端部には敲打痕と思われる細かい剝離がみられる。

11はｊ9区第4Ｂ層出土の黒曜石の剝片で乳白色を呈す。断面は不整台形を呈し、一側縁下部には使用の痕跡とみられるひじょうに細かい剝離がある。

12はｊ17区第3層出土の流紋岩の剝片である。左右両側面は欠損しているが、下端部には細かい剝離が見られる。

13は12と伴出の流紋岩の剝片である。両面とも大きな剝離面を残しており、二次調整はみられない。

木製品（第21図、図版19）

1はｊ9区第3層直上より出土の柄状木製品である。柄元付近の外面にかすかな彫り込みがある。また中程やや柄元よりに目釘孔が1個残っている。茎を納める凹部は長さ9.5cm、幅2.1cm、深さ0.3cmである。柄元、柄頭ともに残存しており、全長12.0cm、幅3.1cmであるが、半面が欠失しているので完形における厚さは不明である。現存の厚さは0.9cmである。

2はｊ13区第2層から出土した楔形の木製品である。杭の先端を切断転用したものであろう。長さは15.3cm、切断面付近で幅5.4cm、厚さ2.1cm、先端部付近で幅2.9cm、厚さ2.0cmを測る。

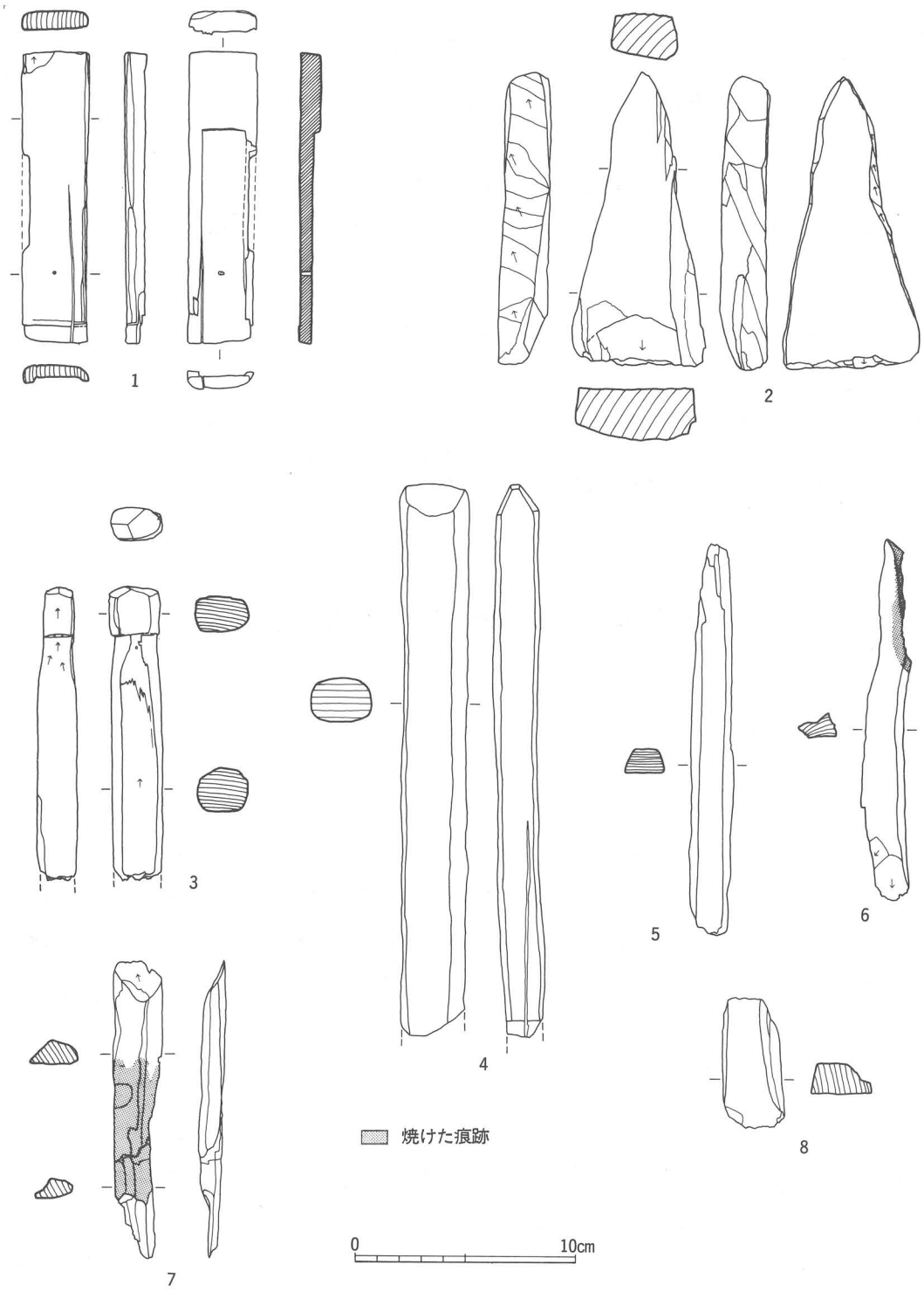
3はｊ13区第2層より出土した有頭棒形の木製品である。上端を木偶頭状に削り出している。上端部付近では断面形が楕円形に近いが、中央部においては円形をなしている。下端は欠損。現存の長さは13.1cm、幅2.3cmである。使途として機織の経巻具あるいは布巻具との考えもある。(4)

4はｊ13区第2層から出土の棒状木製品である。先端を楔状に加工している。長さは25.2cm、断面は楕円状を呈し、厚さは2.0cm、幅は2.7cmである。

6はｊ17区第3層直上より出土した木製品である。長さ16.5cm、断面は不整台形で、端部付近には一部に焼けた痕跡が見られる。他の端部に加工痕が残っており、杭状木製品と思われる。

7はｎ9区第3層から出土したもので、杭状木製品を切断したものと思われる。長さ13.3cm、幅2.2cmである。また表面に焼けた痕跡が認められる。

その他、用途不明なものとして5と8の2点がある。



第21図　木戸開中遺跡出土木製品実測図

陶磁器（図版18—2）

出土総数は10点である。ｊ2区、ｊ5区、ｊ9区、ｊ13区、ｊ17区、ｆ9区から出土しており、いずれも第2層および第3層から出土している。伊万里系、唐津系と推定できるものが数点あるほか、江戸時代から明治時代にかけてのものもみられる。

図版18—2—Aは江戸時代中頃以降の伊万里系の磁器で、袋物の底部である。

図版18—2—Bは江戸時代後半のものと思われる唐津系の磁器である。化粧土による横方向の刷毛目状の文様がみられる。　（赤坂二史・間野大丞・杉原　修）

註(1)　九郎原Ⅰ遺跡出土の凸帯文土器の文様に類似している。島根県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1980年3月
(2)　山本清「山陰の須恵器」『島根大学開学10周年記念論集』1960年
(3)　柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』　第3号　1980年
(4)　島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』1987年
竹内晶子「織機」『弥生文化の研究』5　1986年　雄山閣

第6章　E地点の調査

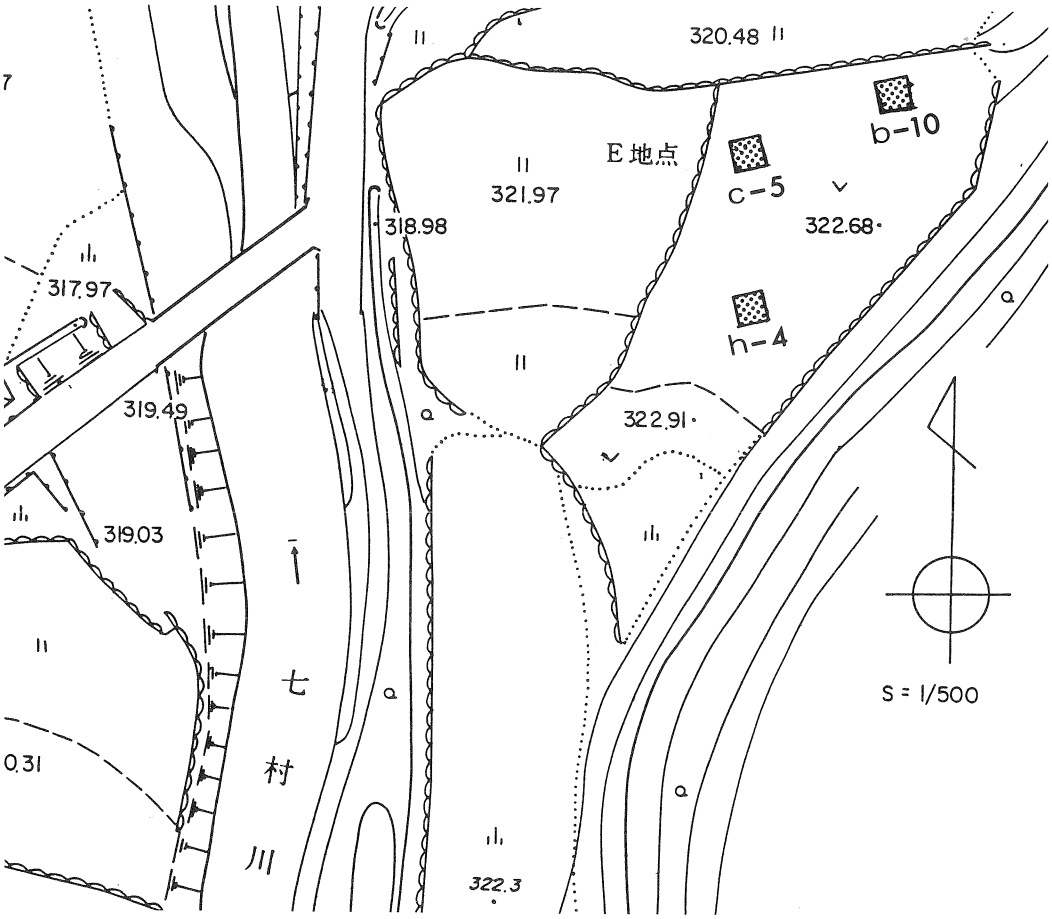
1. はじめに

E地点は、匹見町大字紙祖井手原1126番地に所在する（第2図）。本地点は七村川右岸の河岸段丘上に位置し、背後には崖を控えている。現状は小豆畑で、標高322.17*m*である（図版20—1）。本地点は七村川の流れに沿い、前面に小原川のやや広い段丘面が開けていること等から遺跡の存在が推定されたので、試掘を行うこととした。本地点の調査は1987年8月7日から9日までの3日間実施した。

2. 調査の概要

調査にあたって、他の遺跡と同様に磁北を基準に2*m*間隔で南北方向にａ、ｂ、ｃ…ｉの9点、東西方向に数字で1、2、3…10の11点を定め、3箇所の調査区を設定した。各調査区は、北西隅の杭の名称により、ｂ10区、ｃ5区、ｈ4区と命名した（第22図）。

これら各調査区の基本的層序は、第1層は耕作土、第2層は粘質土層、第3層は大小の礫を含む黒色土層、第4層は黄褐色ないし淡黄色の粘質土層、第5層は礫を含む黒色粘質土層となる。遺物はｂ10区第2A層出土の磁器片を除き、いずれの調査区からも検出されなかった（第23図）。



第22図　E地点調査区配置図

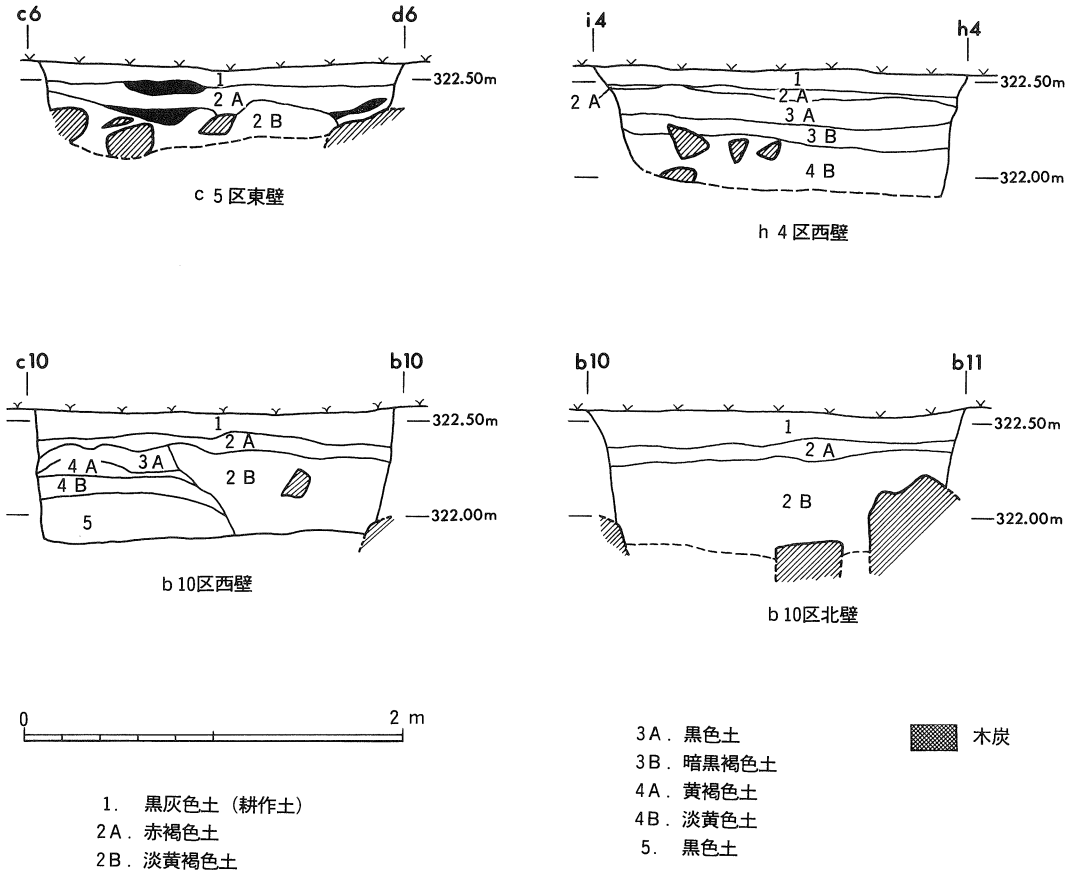
3.　各調査区の概要

b 10区

E地点で最も北側に設定したものである。

第1層　耕作土。層の厚さは平均16cm（最広部20cm、最狭部10cm）、水平に近い状態で堆積。

第2層　粘性のある土層である。色調により、A層、B層に分けられる。A層は赤褐色を呈し、粘性が強い。この層の厚さは平均8cm(最広部10cm、最狭部2cm)。層中からは江戸時代後半のものとみられる磁器片が1片採取されている（図版19—3—B)。B層は淡黄褐色を呈し、粘性があり、径20cm近い礫を含んでいる。この層は調査区の北半にあり、南半には別の層が堆積している。また、この層は、植物遺体を包含し、その遺存状況もよい。他地より運搬され、短期間に堆積したものと考えられる。



第23図　E 地 点 土 層 断 面 図

第3A層　調査区南半のみにあり、黒色を呈し、粘性がほとんどない。層の厚さは平均9㎝（最広部12㎝、最狭部8㎝）。大小の礫を多く含んでいる。

第4層　色調によってA層、B層にわけられるが、ともに南半にしか堆積していない。A層は黄褐色を呈し、粘性がある。層の厚さは10㎝前後と2㎝前後の箇所の2段に分かれる。B層は淡黄色を呈し、粘性がある。層の厚さは平均9㎝（最広部10㎝、最狭部8㎝）でほぼ水平に堆積している。A、B両層とも大小の礫を含んでいる。

第5層　調査区南半にのみあり、黒色を呈し、赤い粒子を含んでおり、粘性をもっている。大小の礫を含んでいる。

c 5 区

b 10区と同じ小豆畑に設定したもの。いずれの層からも遺物の存在は確認されなかった。

第1層　耕作土で黒灰色を呈し、粘性があり、多量の小石を含んでいる。層の厚さは平均10㎝

（最広部12cm、最狭部9cm）、水平に堆積。第2層との層境に、赤い粒子を含んだ木炭が幅約45cm、厚さ約6cmで堆積している。

第2層　粘質土層である。色調により、A層、B層に分けられる。A層は赤褐色を呈し、粘性があり、径10cm以上の礫を含んでいる。層の厚さは4～19cmとばらつきがあるが、南壁では4cm前後で比較的平坦に堆積。またB層との層境に赤い粒子を含んだ木炭のみが1箇所、木炭が2箇所で確認されている。その厚さは4～8cmである。B層は淡黄褐色を呈し、粘性があり、20cm以上の礫を多く含んでいる。A・B両層ともb10区の第2層と同じものと考えられる。

h 4区（図版20―2）

同じ小豆畑に設定したもの。遺物は認められなかった。

第1層　耕作土、層の厚さは平均10cm（最広部12cm、最狭部8cm）で、ほぼ水平に堆積。

第2層　b10区やc5区の第2A層と同一層で、赤褐色を呈し、粘性がある。西壁においては4～6cmの厚さがあり、一部切断されているが、北壁では平均8cm（最広部12cm、最狭部4cm）の厚さで堆積している。この層には小礫が多く含まれている。

第3層　色調によりA層、B層に分けられる。A層は黒褐色を呈し、ほとんど粘性はない。層の厚さは4～16cmで、B層とは比較的水平に接している。礫は第2層よりも小粒になっている。A層はb10区の第3層と同じものと考えられる。B層は暗黒褐色を呈し、平均8cm（最広部12cm、最狭部4cm）の厚さで堆積している。

第4層　淡茶褐色を呈し、ひじょうに小さい石粒を含んでいる。b10区の第4層と区別し第4c層とする。

（林原　修）

第7章　総　　括

1.　1987年の夏期に実施した調査の目的は、圃場整備事業の実施に先行して事業計画域内の遺跡の有無と既発見の遺跡の範囲確認を行なうことにあった。当初の予定では第1、第2期工事区とされた紙祖川左岸地域とその支流の小原川上流域について夏期に遺跡の所在を調査し、存在が判明した遺跡の性格と範囲の確認調査は秋期に行なうことにしていた。しかし第1期の圃場整備工事は10月初旬より開始されるとのことから、予定を急拠変更して当該地区については夏期に遺跡の所在調査と発見遺跡の範囲確認を同時に実施した。

この季節には遺跡の存在が予測される地点の多くは稲が成育中のためいくつかの休耕田を選んで調査を行なった。また紙祖川右岸の第3期工事区についても可能な限り遺跡の所在確認を実施する

ことにした。結果はここに報告したように、小原地区で家廻り遺跡、荒木地区で木戸開中遺跡を新たに発見し、さらに石ケ坪遺跡の北西限を確認することができた。

2.　家廻り遺跡は、匹見盆地の南西端にあり、大形の岩石や礫が堆積する段丘上に立地している。縄文後・晩期の精製土器と思われるやや薄手の破片が、主として水田の床土下の茶褐色土層・砂礫層より検出され、少量の弥生土器もしくは土師器かと思われる土器片と陶器・磁器片が出土した。

茶褐色土層下部には数箇所で浅い陥ち込みが認められている。内部には黒褐色土と角礫が包含されていたが、注意されたことはこのような陥ち込みの上部に土器片が比較的まとまって存在したことである。二つの事実が関連あるとすれば、陥ち込みが人為に関わる何等かの遺構の可能性が出てくるように思われるが、そのように推論しうる手掛りはとくにない。あるいはすでに水田造成の際に上部が大規模に削平されたことも考えられなくもないが、限定された調査ではそれも想像の範囲を出ない。

本遺跡は、立地状況、包含層、遺物の出土範囲と量等から判断して縄文後・晩期と弥生～古墳時代のごく短期間に営まれた小規模な居住跡と見るのが適当といえよう。

3.　石ケ坪遺跡　この遺跡は1984年県道匹見～六日市線の西側にこれと平行する農道が建設された時に発見されたものである。縄文中期と後期の土器がそれぞれ地点を異にして出土したとされ、土器の型式的な特徴とともに出土地点が特定できる貴重な遺跡として注目されたのであるが[(1)]、問題の箇所はすでに道路の側溝下になり、調査は不可能であった。周囲も水田で稲が成育中のため調査できず、止む無く道路より約20m西の休耕田に調査区を設けて遺跡の西側への広がりを確認することになったわけである。調査の結果について注意すべきいくつかの点を列挙すれば次のようになる。

i）基本的な層序は上部より①耕作土層、②赤褐色土層（水田の床土）③黒色ないし黒褐色土層（大小の礫を多量に含む）④礫層の順となる。④の礫層は西・北側がやや高く、東から東南側が低くなっている。匹見～六日市線が走る山脚との間に、南から北の方向に延びる浅い谷状地形の存在が推定される。③の黒色ないし黒褐色土層は西側が薄く、東側が厚い堆積となっている。
検出された遺物は大体この層の下半部に包含されていた。

ii）調査範囲においては明確な遺構は認められない。ただｌ８区、ｌ12区では南北方向に走る溝が検出されている。上場の幅が80～90cm、深さが40～60cmある比較的大形の溝で、溝内の埋土は礫や岩が混入する黒色土である。遺物は包含されてはいない。溝壁や溝底の状況がきわめて不規則なことから自然流路かともみられるが、追跡が必要であろう。

iii）出土した遺物は打製石斧と縄文土器片に鉄器等である。打製石斧はｉ８区の黒色土層から５点が集中的に出土している。また縄文土器片２点がｆ14区とｂ８区の③層より、須恵器片がｉ８区

の①層からそれぞれ検出された。鉄器はｆ８区の①層出土とみられる。縄文土器片はいずれも晩期の所産かと思われるが、小片のため断定はできない。

iv）今回の調査の知見からは、先の縄文中期、後期の土器が発見された箇所との直接的な関係には言及が困難である。しかしｉ８区をはじめとして若干なりとも縄文時代の遺物が得られたことを重視すれば、石ケ坪遺跡がこの付近まで広がっている可能性はじゅうぶんあるとしてよいであろう。あるいは、かの２点の縄文土器が晩期のものであるならば遺跡の下限も一時期新しくなるわけである。精査が期待されよう。

4.　木戸開中遺跡　本遺跡も新発見である。すぐ南には県道匹見～六日市線の西側に沿って水田ノ上遺跡、槍田遺跡が存在しており、それらと一群の遺跡と考えられよう。調査結果について注意すべき諸点として次ぎの４点が挙げられる。

ｉ）調査箇所の休耕田は湿田ないし半湿田で、東側には山裾からの豊かな湧水が側溝を流れ、地下水位が高い。遺跡の基本層序は上部より①水田耕作土層、②灰褐色土層、③黒褐色土層、④黒茶色土層、⑤黄褐色砂礫層となる。遺跡の基盤をなす第５層は、砂礫中に人頭大から一抱えもあるような巨石を含んでいる。各区における砂礫層の上部のレベルをみると西端のｄ９区では標高265.5～265.6ｍあたりで巨石と砂礫が現われ、中央のｊ９区の場合は第４Ｃ層の下部で認められ、標高265.2～265.3ｍと測定できる。東端のｑ９区では標高264.8～265.0ｍまで掘り下げても砂礫層は検出されなかった。一方南端のｊ17区では標高265.6～265.7ｍに第５層の上部があり、北端のｊ２区の砂礫層は標高265.5～265.6ｍを示している。つまり第５層の砂礫層は少し西側に彎曲しながら東に傾斜しており、このことから匹見～六日市線側に小規模な谷地形の存在が推定されるのである。

ii）砂礫層の上に載る第４層とその上層の薄い第３層も注目すべき土層である。第４層はかなり厚い土層で礫を含み、Ａ、Ｂ、Ｃの３層に細分されているが、これは鉄分の沈殿等による色調の変化と砂粒の包含状況で分けられたものである。全体的には高い地下水の影響を受けて還元状態にあり、とくにＢ層にそれが強く表われている。Ａ層は黒味が強いが少し茶色を帯びているのは一時的に酸化状態にあったことを示すのであろうか。このことと関連して注意すべきは、第４層上面がほぼ全域にわたって水平を保っているという事実であり、これに載る第３層もまた水平に堆積し、上面には小石が敷き詰められたような状態で見出されている。この二つの事実からは少なくとも第４層上面と第３層上面には人為が加えられている可能性が高く、なんらかの生産ないし生活面と考えたい。

iii）出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、打製石斧、磨石、木器、木材、木片等かなり多彩である。縄文土器はいずれも細片のため型式的な特徴を把握しにくいが、おおむね晩期の型式のようにみられた。これらは第４Ａ層、第４Ｂ層に包含されていた。弥生土器は前

期、後期のものがみられる。前期の土器は壺・甕形土器が第4A層、第4B層から見出されており、一見縄文晩期と弥生前期の土器が共存する関係にあるやに思われる。弥生前期の土器はその前半を下らない型式と考えられることもこの想定の妥当性を支えるものであるが、問題は第4層の形成因と縄文土器の明確な型式判定にある。仮りに第4層が谷地形に堆積した流土であるとすれば、遺跡の近辺にこのような共存を現出する条件があったということになろう。今後近隣地区での精査が待望される。第3層出土の弥生後期の土器はその後半期のものである。第3層からはこのほか土師器、須恵器が検出され、木器、木材片、木片もこの層の上部から第2層の下部にかけて多く発見された。調査区ではｊ9区、ｊ13区、ｊ17区、ｇ9区と中央から南にかけて多くの遺物が集中する傾向にある。人為による廃棄の結果であろうか。

打製石斧は第4A～4B層から発見されている。扁平で一面に自然面を残し、周縁は比較的ていねいに剝離調整されている。形状は短冊形、長楕円形である。出土層位からすれば縄文晩期の所産の可能性が考えられよう。このほか局部に研磨がみられる小型の石器や黒曜石片が第4層下部から、磨石は第3層からそれぞれ検出されている。

このように各遺物の内容と層序を対比すれば、木戸開中遺跡が混乱した再堆積層からのみなる遺跡ではないことが判明する。

iv）以上の検討に立って木戸開中遺跡の意義を概観しておきたい。本遺跡が水田ノ上遺跡、槍田遺跡と一群の遺跡であり、しかも縄文晩期から弥生前期にかけて形成された節が認められることからすれば、遺跡群の内容の面でも一体性をもつものといえよう。今後本格的な調査が展開されるならば匹見町における水田耕作の開始の事情が具体的に明らかにされることは間違いない。最近広島県大朝町の横路遺跡で弥生前期の土器が発見され[(2)]、島根県金城町波佐の七渡瀬遺跡からも前期弥生土器が出土している[(3)]。西中国山地地域の稲作農業の始まりについては、これを単に海岸平野からの二次的波及とのみ解釈することは本遺跡の事実ともあわせて再検討が必要かと思われる。

次ぎに触れておかねばならないのは、出土遺物が、その量は必ずしも豊富ではないが、時期的に縄文、弥生、古墳各時代のものを含んでいるという事実である。このことは本遺跡（再堆積層の遺跡ならば近辺に存在が予測される居住地）が多少の間断はあるにせよ、長期間にわたってほぼ継続的に存在したことを示しており、その意味で匹見盆地の歴史的な定住傾向を解明する資料を提供しうるものとしてよいであろう。

5.　石組E地点の調査　本地点は小原川に注ぐ細流・七村川の谷口に当り、山裾に接した狭い段丘平坦面である。小原川の氾濫源より高位にあって、眺望がきく箇所なので試掘を行った次第である。調査結果はすでに示した通り、遺跡と認定しうる材料はなにも得られなかった。察するところ崖堆を均して畑にしたもののようで、近年の人為による平坦地の如くに見受けられる。各調査区の

セクションの観察によってもそのように判定される。

われわれが1987年夏期に実施し遺跡の所在確認調査の概要と認識された諸事実、その大まかな評価は以上に記述した通りである。新発見の遺跡、既存の遺跡の状況から知られることは匹見町域がきわめて遺跡の集中度の高い山間盆地ということである。これらの組織的、系統的な調査が進めば当該地域はもとより西日本における原始・古代史に関する重要な知見が得られ、歴史展開の道筋の理解に大きな貢献となることは確かである。　（田中義昭）

註(1)　足立克己「山陰石見地方における縄文後期前～中葉土器について」（『東アジアの考古と歴史』中　岡崎敬先生退官記念事業会編）1987年

(3)　横路遺跡調査団『横路遺跡』1982年

(2)　金城町教育委員会『島根県那賀郡金城町内遺跡分布調査報告書Ⅰ』1986年

1．家廻り遺跡遠景（南側から）

2．ａ３区北壁土層

図版２

１．ｂ７区東壁土層

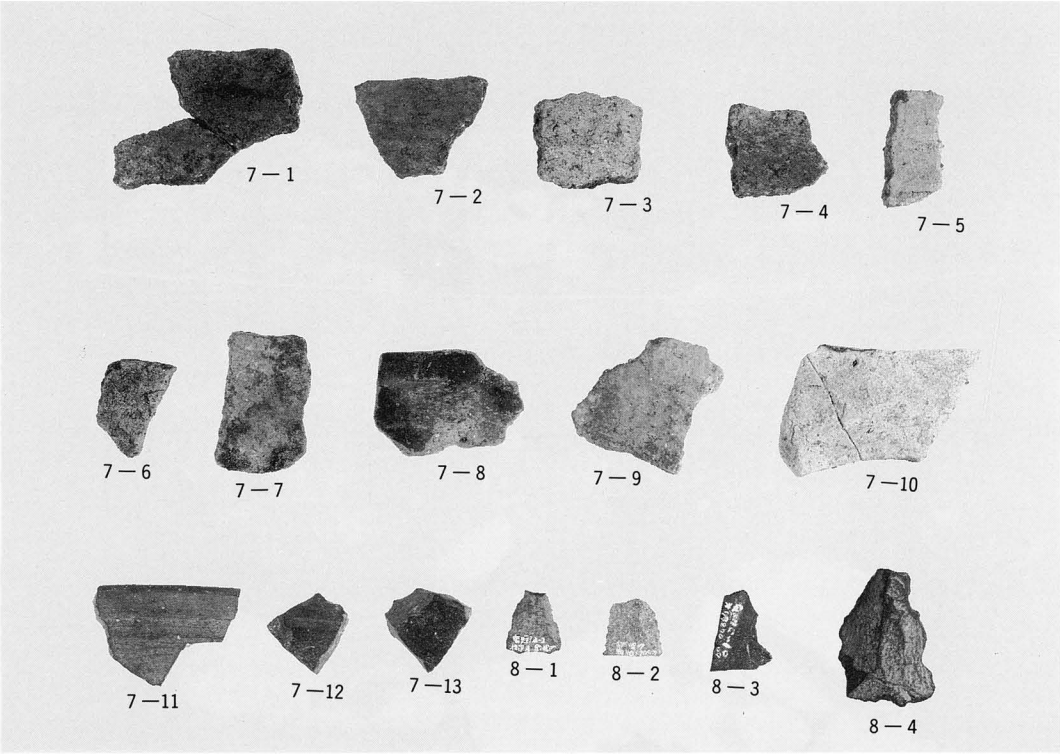
２．ｃ７区東壁土層

1．ｂ７区、ｃ７区（南側から）

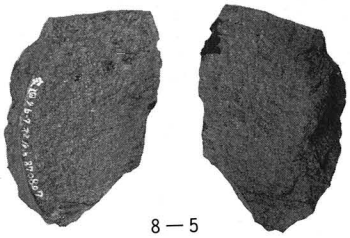
2．ｇ７区東壁土層

図版 4

1．ｂ７区遺物出土状態

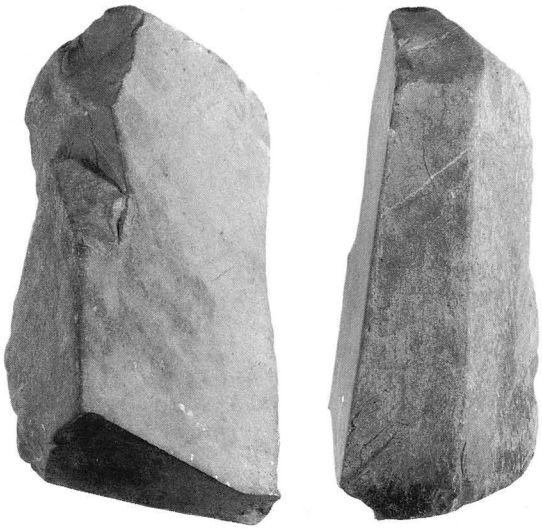


2．家廻り遺跡出土遺物



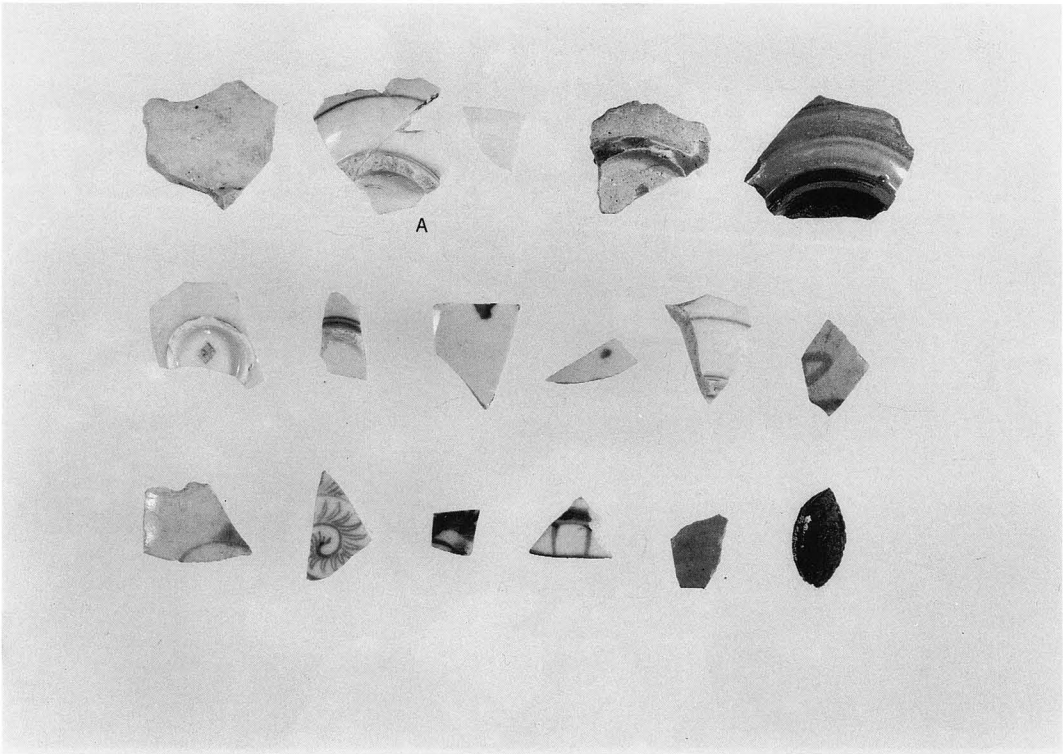
8－5

1．ｂ７区出土剝片



8－6

2．ｃ７区ＳＫＯ２出土砥石



3．家廻り遺跡出土陶磁器

図版 6

1．石ケ坪遺跡遠景（北東側から）

2．ｂ８区北壁土層

１．ｂ４区東壁土層

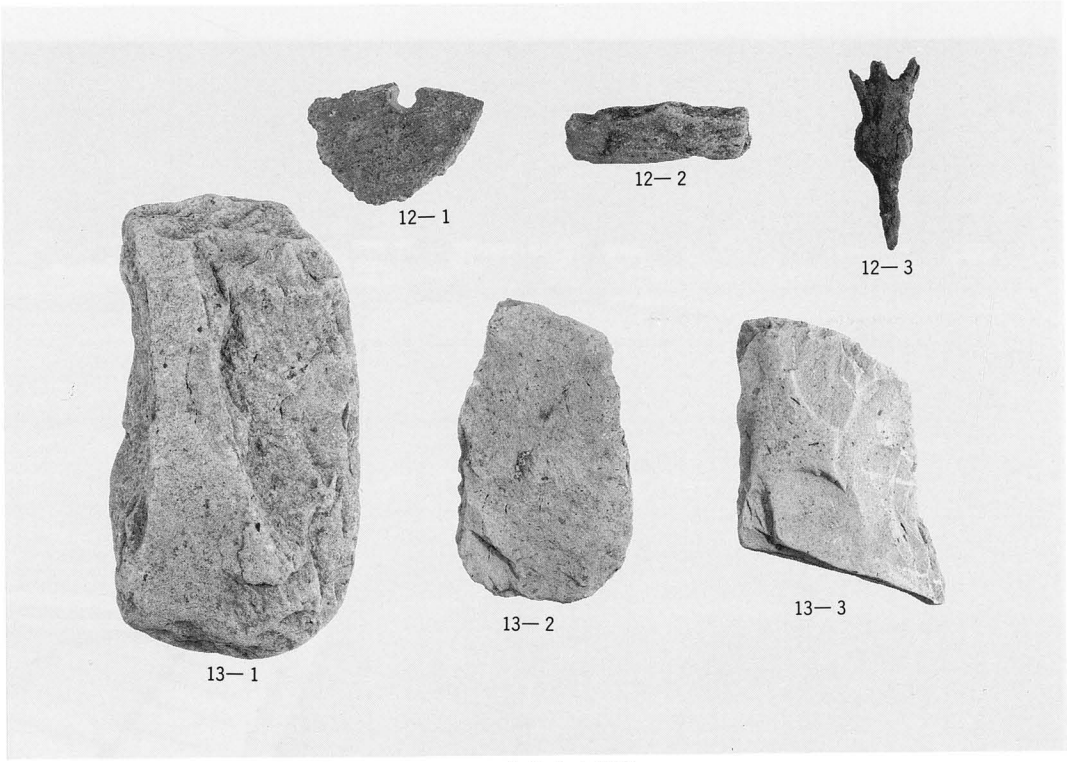
２．ｆ８区北壁土層

図版８

１．ｉ８区北壁土層

２．１８区南壁土層

1．１８区西壁土層



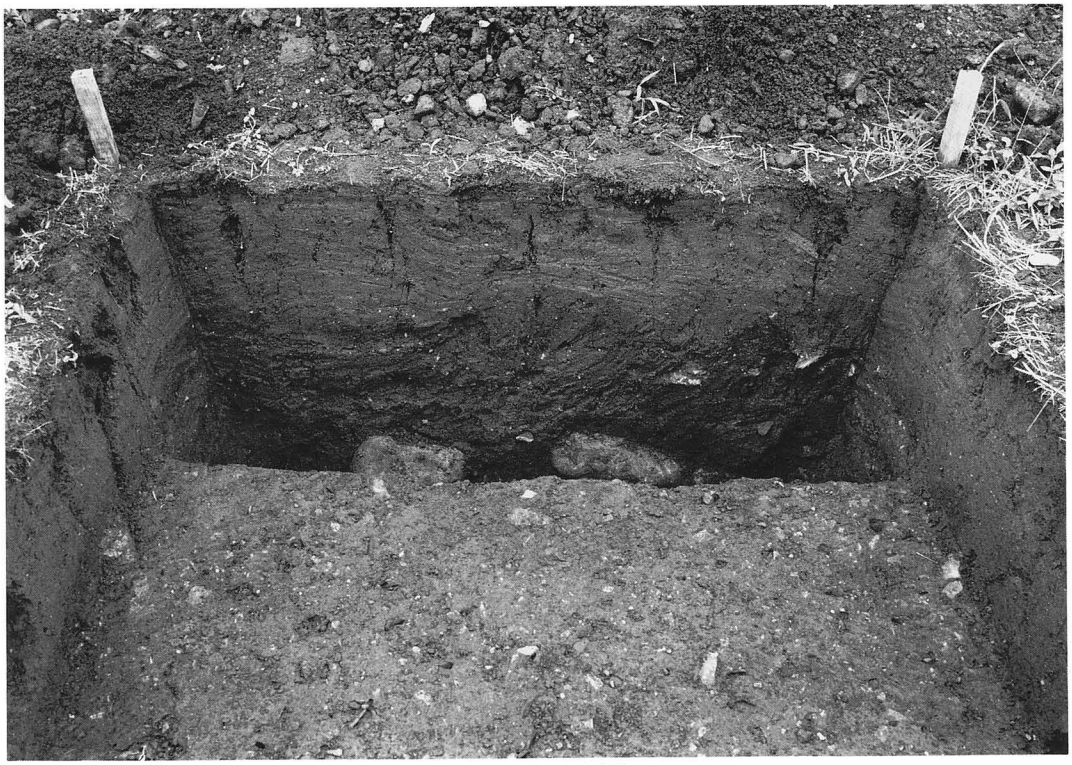
2．石ケ坪遺跡出土遺物

図版10

1．木戸開中遺跡近景（南側から）

2．木戸開中遺跡近景（南東側から）

1．ｊ２区東壁土層



2．ｊ５区東壁土層

図版12

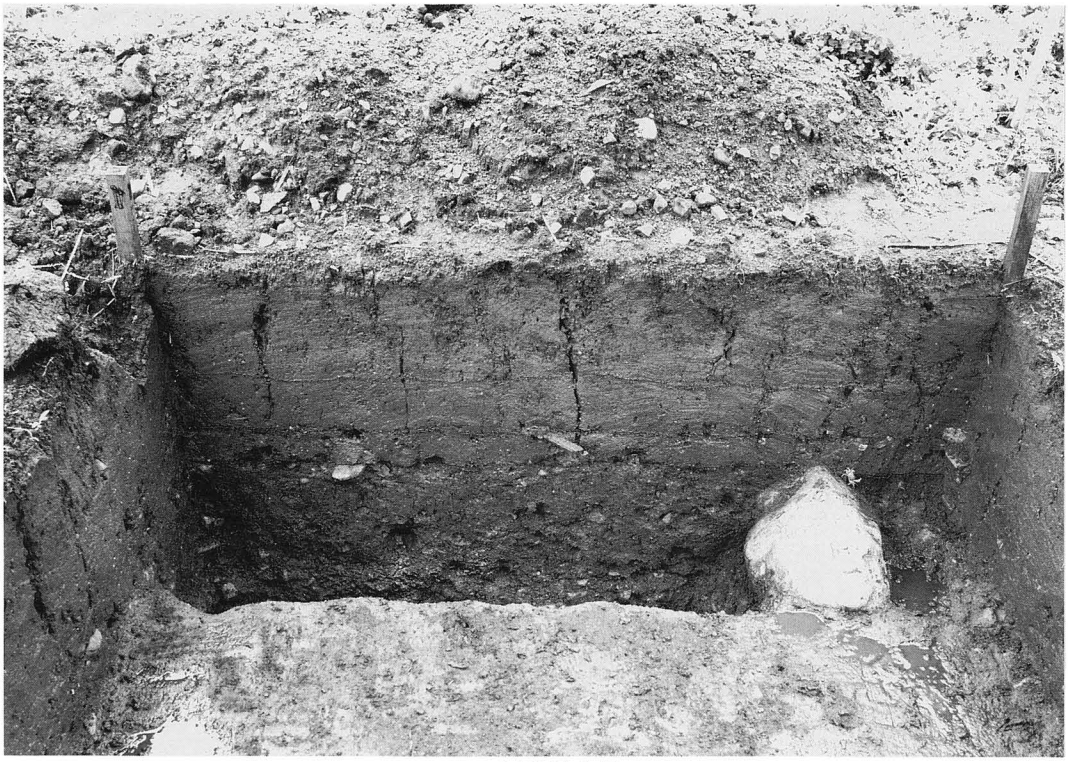
1．ｊ９区東壁土層

2．ｊ13区東壁土層

1．ｊ17区東壁土層

2．ｄ９区北壁土層

図版14



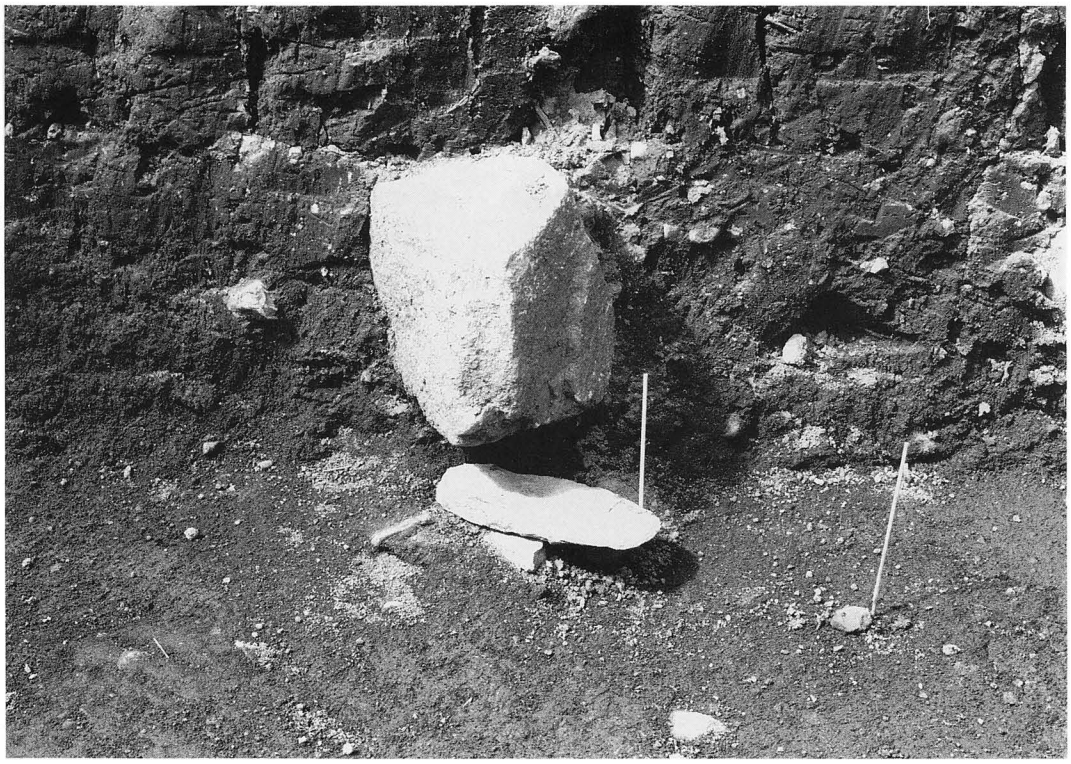
1．ｇ９区北壁土層

2．ｊ９区北壁土層

1．ｎ９区北壁土層

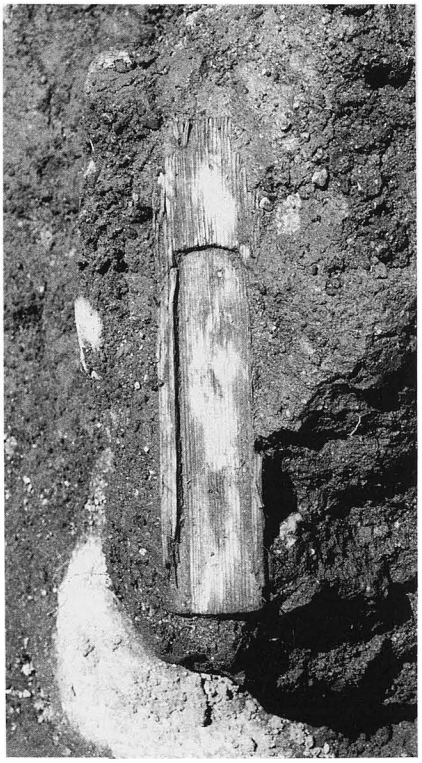
2．ｑ９区北壁土層

図版16

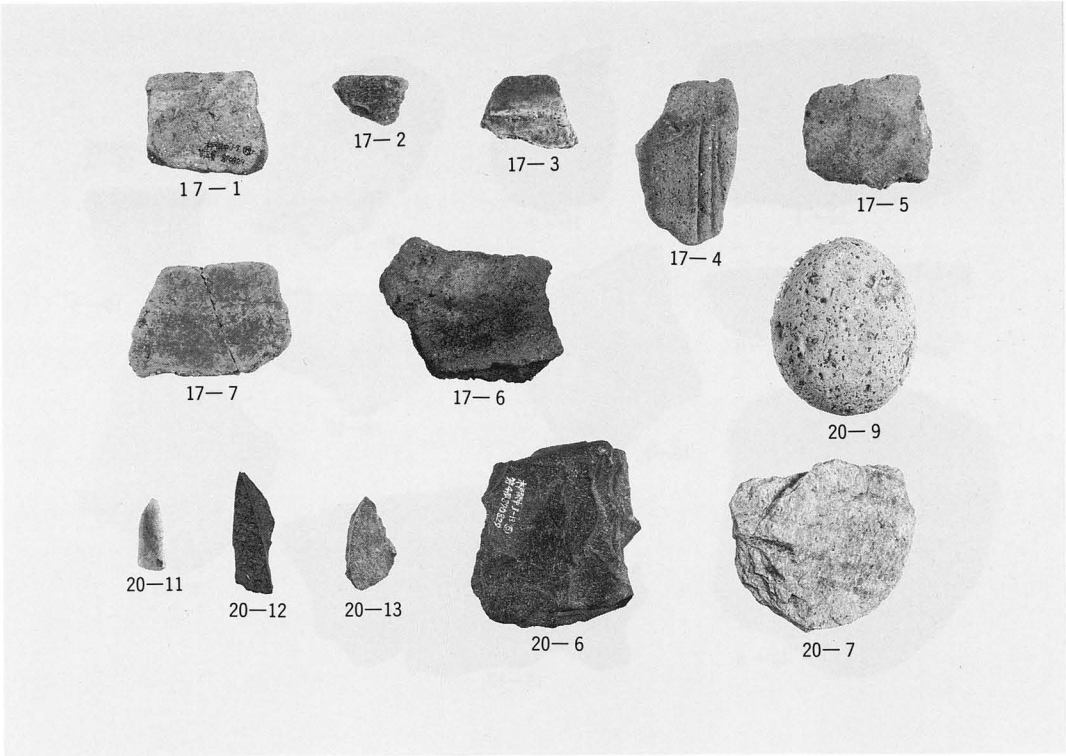


1．ｊ13区打製石斧出土状態

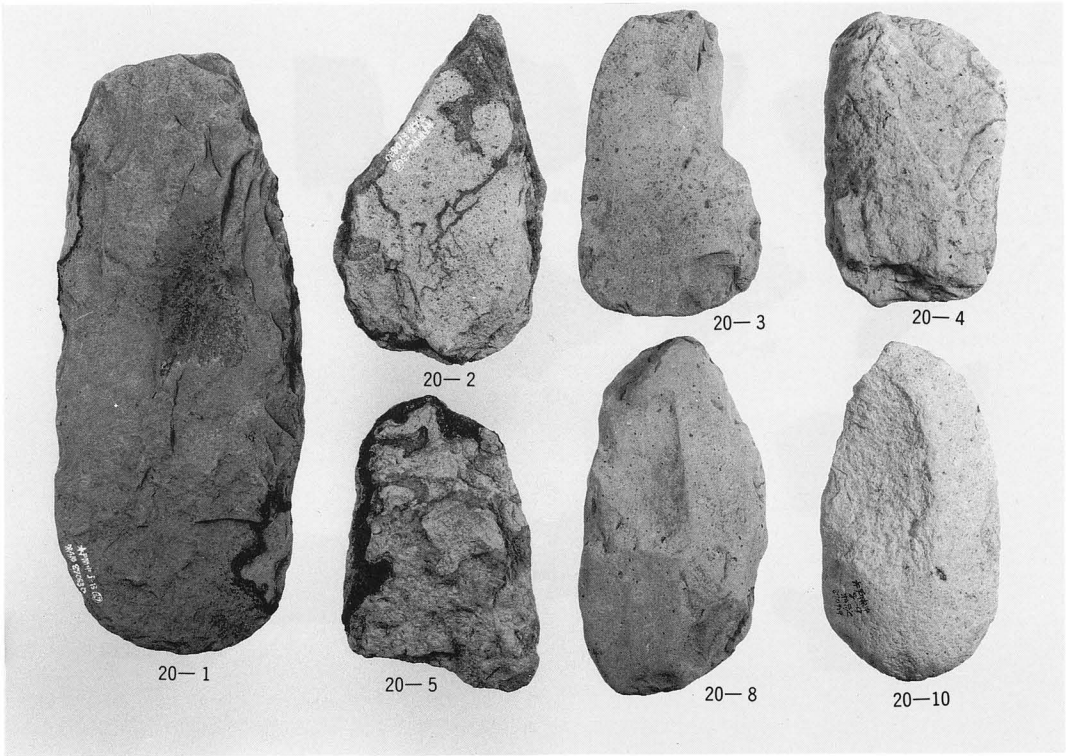
2．ｊ９区弥生土器出土状態



3．ｊ９区木製品出土状態

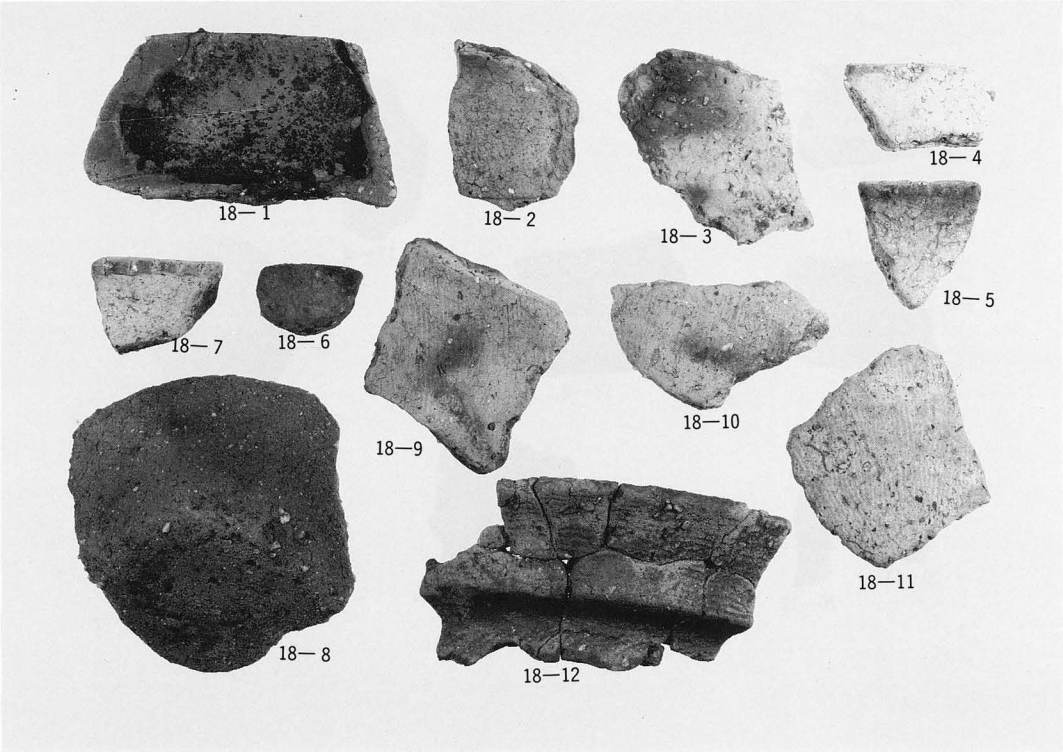


1．木戸開中遺跡出土遺物

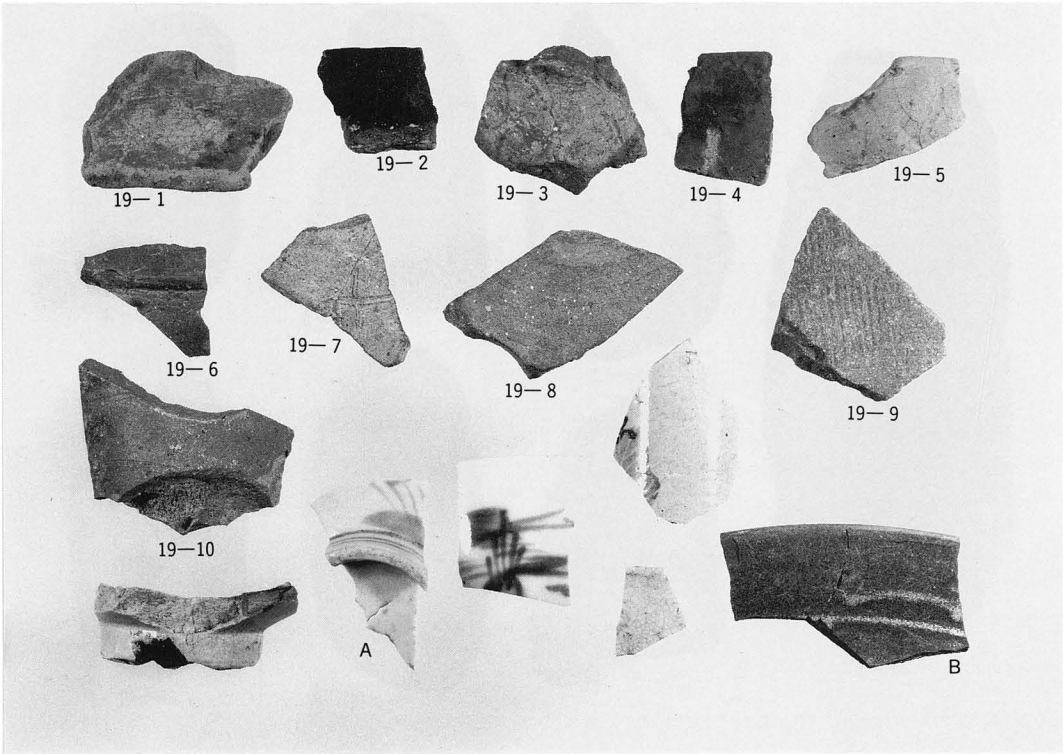


2．木戸開中遺跡出土遺物

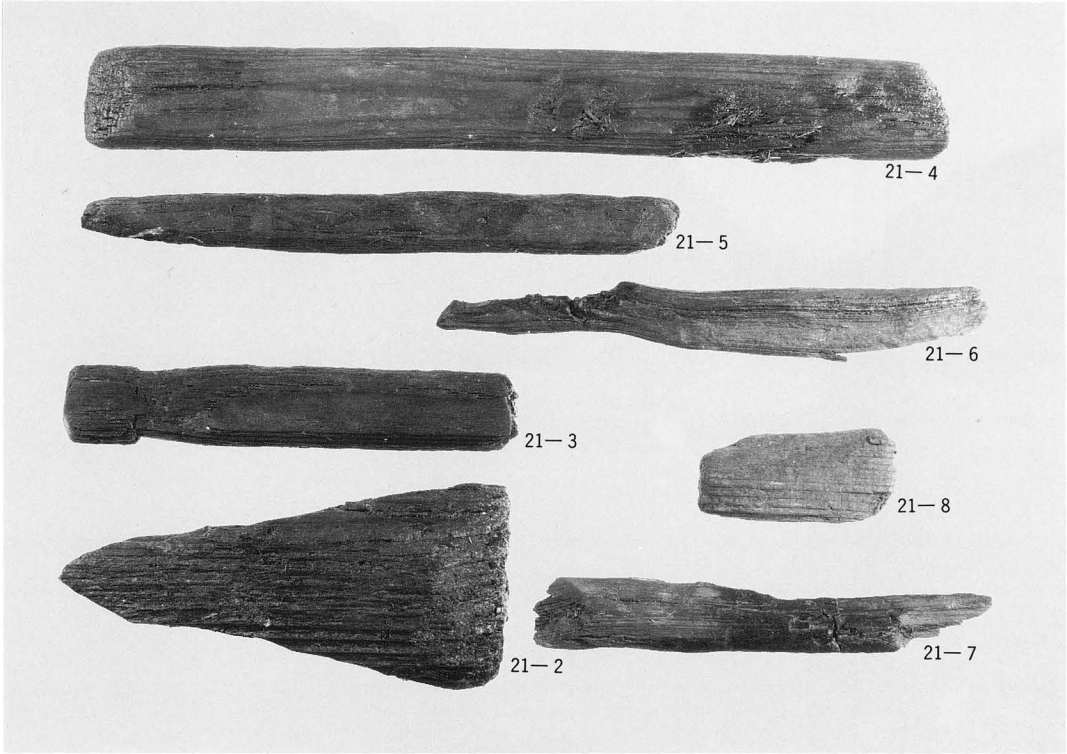
図版18



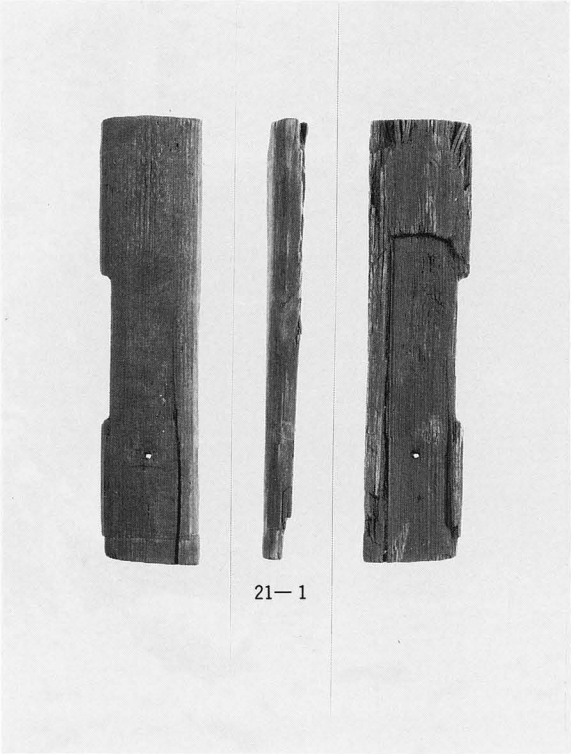
1．木戸開中遺跡出土遺物



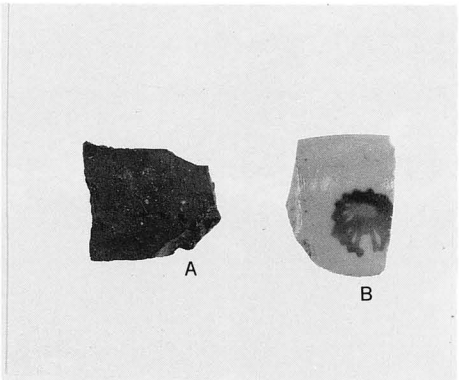
2．木戸開中遺跡出土遺物



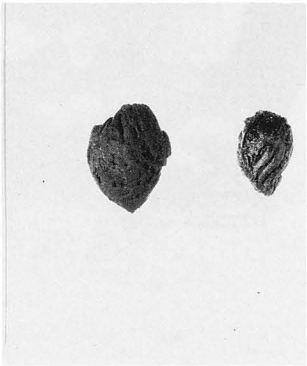
1．木戸開中遺跡出土木製品



2．木戸開中遺跡ｊ９区出土木製品



3．石ケ坪遺跡出土陶器(A)とＥ地点出土磁器(B)



4．木戸開中遺跡出土種子

図版20

1．E地点遠景（南西側から）

2．h 4 区西壁土層

昭和63年３月10日
昭和63年３月31日

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ

発　行　匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町

印　刷　株式会社　報　光　社
島根県平田市平田町993